

寛政年間における三井越後屋の木綿仕入状況とその特質

下向井 紀彦

はじめに

- 一 伯州木綿の仕入注文増加
 - 二 江戸向店と伯州木綿
 - 三 大坂本店と伯州木綿
 - 四 仕入注文数急増に伴う問題
 - 五 仕入不足解消策の模索
 - 六 仕入補完体制の整備
- おわりに

はじめに

一八世紀後半は、幕藩制的流通構造の転換期ととらえられている。すなわち、在郷商人の台頭によって都市問屋・問屋仲間の流通独占が脅かされ、城下町問屋を介さない直売という産地と三都を直結する流通ルートが現れるなど、旧来

の幕藩制的流通構造は徐々に変容していく⁽¹⁾。このような在郷商人の台頭による流通構造の変容を地域経済圏の形成という視点から、関東地廻り経済圏や商品作物生産の伸張による生産地に関する研究が進み、各地の在郷商人の個別研究が積み重ねられてきた⁽²⁾。これらの研究は、特に在郷商人と商品生産・流通構造との関係、また彼らと中央市場・都市問屋との関係を中心に検討している。

一方、三井越後屋・白木屋・大丸・長谷川家等、当該期の都市問屋資本の個別動向については、経営帳簿を用いた経営分析が中心となっており、集荷における地方都市商人、買宿や買次問屋の編成、経営改革などの研究も進展している⁽³⁾。生産地との関係や商品流通への関与については、問屋仲間としての研究が進展している⁽⁴⁾。しかし、商品の仕入から販売までのプロセスとしくみ、それに関与する人々の活動の詳細、あるいは他店との競合と調整等の経営の動態についてはなお検討の余地が残っている。商品作物生産の進展や在郷商人の成長、新たな商品流通ルートの成立など、当該期の経済動向に都市問屋資本が如何に対応したのか、都市問屋資本側の史料を用いた研究は具体的に明らかになっていないのが現状である。また、都市問屋資本の仕入活動の実態についてもあまり関心が払われていない。本稿は寛政年間の三井越後屋京本店の木綿仕入を通して、右の課題に迫ろうとするものである。

三井越後屋京本店では天明年間から、低価格で大量集荷が可能な伯州木綿市場を開拓し、伯州木綿を中心に仕入れるようになっていた。伯州木綿は鉄・蠟・紙等とともに鳥取藩の主要産業の一つであり、綿作は明和・安永期以降、木綿織は天明期以降急速に普及していき、特に木綿織は、文政年間には約五〇万反から八〇万反を生産するようになる⁽⁵⁾。三井越後屋では天明二年（一七八二）から伯州赤碕の西紙屋を買宿に任命して木綿直仕入を始める。寛政十二年（一八〇〇）からは雲州の西台屋彦兵衛を買宿に任命し直仕入を開始する⁽⁶⁾。雲州木綿の生産は伯州よりも早く、すでに安永年間には木綿の他国売りがなされており、木綿市も発達していた。雲州で木綿市の立つところは平田・松江・杵築・宍道・

直江・今市・加茂・大東・三刀屋であった。⁽⁷⁾三井越後屋でもこの木綿市を通じて木綿集荷を行っていた。

こうして寛政年間には、伯州木綿・雲州木綿は三井越後屋京本店における主力商品の地位を確立し、寛政年間から慶応年間まで京本店の仕入れる木綿の三割から五割は伯州木綿と雲州木綿で占め、他の仕入先を圧していた。⁽⁸⁾三井越後屋が伯州木綿の直仕入を開始したとき、他のどの都市問屋資本もいまだ直仕入に参入していない地であり、三井越後屋が他に先じて伯州木綿に着目して市場開拓したことが、伯州木綿の独占集荷を可能にしたのであった。三井越後屋は買宿を通して、生産者に織機や繰綿を提供し、前貸しによる木綿生産を行い積登せていた。三井越後屋は伯州において、①商品生産奨励の推進者として、②買宿を媒介とした商品生産の組織者として、主導的立場にあり、価格決定においても他に対して優位性を有していた。しかし、寛政年間になると、伯州木綿の生産量も増大し、他の大坂商人による仕入も始まる。その結果、三井越後屋の伯州木綿の仕入量が減少するとされ（逆に雲州木綿の仕入は増加）、他の在地商人による流通経路拡大によって三井越後屋は伯州木綿の仕入価格決定における優位性を喪失したと評価されている。本稿では、寛政年間における伯州木綿仕入について、以上みてきた研究成果を踏まえて、これまで明らかにされていない注文増減の実態とその要因について検討したいが、そのさい、京本店の内部的要因や江戸・大坂の各店舗との関係について留意しなければならない。

そこで本稿では、①三井越後屋の仕入部門である京本店による木綿注文数の算出・確定方法を明らかにすることを通して木綿仕入における京本店の機能と役割について検討を加え、三井越後屋の大坂・江戸の各営業店における伯州木綿重視とその要因について明らかにする。これをふまえ、②各営業店からの注文増加と伯州木綿の仕入不足状況、仕入不足への京本店の対応を具体的に明らかにしていく。③そして、これらを踏まえて三井越後屋京本店の商品仕入を在地商人・他の都市問屋資本との関係の中で考察する。

- (1) 林玲子『江戸問屋仲間の研究』（お茶の水書房、一九六七年）、中井信彦『転換期幕藩制の研究』（塙書房、一九七二年）、北島正元『江戸商業と伊勢店』（吉川弘文館、一九六二年）。
- (2) 例えば、八木哲浩『近世の商品流通』（塙書房、一九六二年）、伊藤好一『江戸地廻り経済の展開』（柏書房、一九六六年）など。なお、本稿では在地商人という表現を用いているが、現地の商人という意味で使用している。また、三井越後屋の伯州木綿仕入に関する史料からは、買宿西紙屋以外の現地商人についてはほとんど知ることはできない。伯州木綿の生産・流通構造において、在地商人が三井越後屋の参入と独占に対していかに対応していたかについては、三井越後屋史料と藩政史料・地方史料を総合的に分析することによって、別途検討を進めたい。
- (3) 『三井事業史』（本編第一巻、一九八〇年）、賀川隆行『近世三井経営史の研究』（吉川弘文館、一九八五年）、前掲北島著書、『大丸二百五十年史』（一九六七年）、『白木屋三百年史』（一九五七年）。
- (4) 前掲北島著書、前掲林著書。
- (5) 『鳥取県史』第五卷近世文化産業（第四章第一節「近世産業概観」、河手龍海・浜崎洋三執筆担当、一九八二年）。『鳥取県の歴史』（山川出版社、一九九七年）。なお、木綿をふくめて鳥取の在方産業については主として藩政史料を用いた安藤精一氏の研究があり（安藤精一『近世在方商業の研究』吉川弘文館、一九五八年）、木綿の流通統制策については山中寿夫氏が三井越後屋の史料も利用しつつ明らかにしている（山中寿夫「鳥取藩の幕末藩政改革と国産流通統制」『鳥取大学学芸部研究報告 人文・社会科学』一四、一九六三年、同「化政期鳥取藩における木綿の流通統制について」『鳥取大学学芸部研究報告 人文・社会科学』一六、一九六五年）。
- (6) 前掲『三井事業史』、前掲賀川著書、下向井紀彦「天明年間における三井越後屋の伯州木綿仕入活動」（『三井文庫論叢』四六、二〇一二年）。買宿とは、三都商業資本に従属して現地で木綿仕入にあたる現地商人である。西紙屋は現地仲買からの仕入、木綿生産者からの集荷で木綿を確保し、積み登せていた。
- (7) 伊藤好一「出雲の木綿市」（『地方史研究』一四一・三、一九六四年）、『三井事業史』本篇第一巻、四二八頁。
- (8) 前掲下向井論文二〇一二年、一一頁。

一 伯州木綿の仕入注文増加

1 京本店における注文数確定方法

京本店は、三井越後屋本店一卷（呉服・木綿部門）の統括部門であるとともに、呉服・木綿類の仕入部門であった。まず、仕入の前提として伯州・雲州木綿をもとに、京本店の木綿注文数の確定方法を確認したうえで、仕入部門としての京本店の役割を明らかにしておく。なお、京本店で木綿仕入を担当していたのは木綿方という部署である。木綿方は大坂本店などにも設置されているが、以下木綿方という場合、特記しない限り、京本店の木綿方をさす。

京本店木綿方の仕入れる伯州・雲州木綿は江戸向店・江戸芝口店・大坂本店の三店舗の需要に応じるものであった。木綿方では、各店舗からの過去二年間の注文量を平均して必要木綿量を推計し、木綿方で数字の調整を行った上で最終的な仕入〓注文量を確定し、伯州買宿西紙屋に注文書を送っていた。西紙屋に残っている注文書は京本店の重役手代の名前で発信されているため、京本店上層部の最終的な決済を受けた上で注文していたものと思われる。

具体的にみていこう。木綿方は毎年秋に、その年秋から翌年夏に現地で仕入れる木綿数を決める（「買方調」）。第1表は寛政十年（一七九八）の伯州木綿注文数確定手順である。寛政十年秋に注文する木綿は、翌年（寛政十一年）秋・翌々年（寛政十二年）春夏に各店舗から来るであろう注文に対応する品物になる（「未秋注文・申春注文買方入用」）。木綿方は、寛政十年九月に現地に送る注文数算出のため、去年（寛政九年）と今年（寛政十年）に各店舗から送られてきた品目別の注文数を合計し、二ヶ年平均を取り、これを各店舗の必要木綿数として見積もる（第1表・第2表の①）。寛政十年の場合、各店舗の寛政十一年度の必要木綿量は六万二〇六〇反と見積もられている。各店舗が実際に必要とし

数の操作（寛政10年注文の場合）

芝口店			向 店				大坂本店			
同秋	寛政10年春	同秋	寛政9年春	同秋	寛政10年春	同秋	寛政9年春	同秋	寛政10年春	同秋
4,200	2,300	4,650	9,000	13,500	9,050	17,000	—	—	—	—
4,000	2,800	3,700	2,000	1,700	2,000	3,000	—	—	—	—
2,600	—	1,600	—	4,550	—	2,300	—	1,330	—	2,020
350	570	—	—	—	—	—	800	970	720	660
—	—	—	2,400	2,130	6,010	5,310	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	300	400	450	300
—	—	—	—	—	—	—	—	500	—	500
—	—	—	—	1,000	—	1,000	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	500	—	500
11,150	5,670	9,950	13,400	22,880	17,060	28,610	1,100	3,700	1,170	3,980
16,600		15,620		36,280		45,670		4,800		5,150
		32,220				81,950				9,950
										124,120
										62,060

文庫所蔵史料 別1722)。

ている数字を上げてくるのではなく、木綿方で過去二ヶ年分の注文実績に基づいて機械的に各店舗の必要木綿量を推算するのである。

次に、木綿方は伯州へ発注すべき木綿数を決定する。第2表が木綿方での注文数の調整工程である。ここではまず木綿方が、②今年秋段階で把握している在庫（有物）と、③来春・夏の予測追加注文分（来春注文・夏注文共）・三店仕入不足分⁽¹⁾をそれぞれ確定して差し引きして、④現

第2表 京本店での木綿注文数（寛政10年注文の場合）

項目	反数
①各店二ヶ年平均	62,060
②有物	27,000
③来春注文・夏注文共、三店仕入不足	22,700
④差引	4,300
⑤入用分	57,760
⑥伯州木綿注文数	60,000

出所)「伯州買方控」(三井文庫所蔵史料 別1722)。

第1表 各店舗の注文

	寛政9 年春
生下シ地	2,800
晒地	2,500
両面染 小紋中形	—
更紗地・片面染 小紋中形・半晒共	150
色物・片面染 小紋中形・半晒共	—
真岡	—
小裁地	—
手拭地	—
紅地	—
季別合計	5,450
年別合計	
ニヶ年合計	
三店ニヶ年合計	
三店ニヶ年平均①	

出所)「伯州買方控」(三井

ら、四三〇〇反の余剰分を除いた五万七七六〇反が最終的な必要量である。木綿方では、さらにこの数字を調整し、⑥西紙屋への注文数を確定する（ここでは六万反）。第五章で触れるように、木綿方では計算上の木綿注文数があまりに膨大になる場合、実際の注文数を削減する場合がある。各店舗からの実際の要望を踏まえない以上、木綿方には過不足の少ない適切な注文数決定が求められていた。木綿方（すなわち仕入部門である京本店）は、必要木綿数の集計と注文数の調整において重要な役割を担っていたのである。

木綿方では、この数字を踏まえて西紙屋への注文書を作成する。第3表は西紙屋に残る京本店からの注文書の品目別・単価別の注文数である。注文書には生木綿六万反の内訳として、生下シ地、晒地、小紋中形・半晒地・真岡地・小裁地・手拭地・紅地が記載されており、第1表の品目とほぼ一致する。価格帯は、裾（値が付かないものであるうか）から一三匁程度まであり、多くが九匁以下に集中している。注文書の内、生下シ地と晒地には品質についての注文も記載されている。たとえば晒地には「随分細ニ而糸揃宜品御調人可被成候」とあり、京本店の求める晒地はきめ細かい生地である。また、寸法については全て同じ規格で注文しており「地巾九寸已上、惣尺二丈七尺より短キ者一切無用」とあるように、幅は九寸以上、尺は二丈七尺より短い物は不可としている。

第3表 京本店より西紙屋への注文数（寛政10年）

（単位：反）

	晒地	生下シ地	小紋中形・ 半晒地	真岡地	小裁地	手拭地	紅地	合計
裾～								
4匁5分	3,500	6,000	2,000				500	
5匁					500	1,000		
5匁5分	4,300		4,500					
6匁		8,000						
6匁5分	1,500		3,500					
7匁								
7匁5分	500		3,000					
8匁								
8匁5分	200	7,000	3,000					
9匁								
9匁5分			1,000					
10匁								
10匁5分			300	700				
11匁								
11匁5分								
12匁								
12匁5分								
13匁								
合計	10,000	30,000	17,300	700	500	1,000	500	60,000

出所）「京本店木綿御注文帳」（鳥取県立博物館所蔵 西紙屋資料35）。

これらの仕様を記載したあと、最後に木綿方からの注文木綿の仕様についての注意書と、重役手代からの注文仕様についての注意書があり、京本店支配ら手代²⁾の署名・押印の上で、宛所に西紙屋佐兵衛の名前を記載している。注意書には「尺寸之儀毎度得御意候へ共、兎角無幅物短尺之品多有之、直引相立困入候」など、寸法の足りない品物が多く値引き対象となり困っている旨が記載されており、寸法チェックを徹底するよう指示している。重役手代も同様の指示をしている。京本店では西紙屋への木綿注文にあたり、品質はもちろんのこと、許容範囲内の規格の木綿仕入を要求していたのである。以上の注文に基づき、西紙屋は伯州木綿の仕入れを行っていたのである。

2 江戸・大坂各店舗の必要木綿量

木綿方が集計した各店舗の必要木綿量の動向から、店舗別の伯州木綿の需要をみてみよう。第4表は京

寛政年間における三井越後屋の木綿仕入状況とその特質（下向井）

第4表 京本店の伯州・雲州木綿注文高

（単位：反）

		各店舗の必要木綿量				京本店で 決定した 注文高 E	雲伯木綿注文高計		
		合計 A	江戸 芝口店 B	江戸 向店 C	大坂 本店 D		合計 F	伯州 木綿 G	雲州 木綿 H
寛政5年丑	1793						20,000	20,000	
寛政6年寅	1794						40,000	40,000	
寛政7年卯	1795						72,000	72,000	
寛政8年辰	1796	51,160	15,665	30,950	4,545	59,360	60,000	60,000	
寛政9年巳	1797	55,775	15,900	34,965	4,910	69,875	70,000	70,000	
寛政10年午	1798	62,060	16,110	40,975	4,975	57,760	60,000	60,000	
寛政11年未	1799	66,206	16,118	44,750	5,338	62,126	50,000	50,000	
寛政12年申	1800	63,566	15,423	43,505	4,638	53,990	45,000	45,000	
享和元年酉	1801	61,270	15,125	42,300	3,845	62,830	53,000	35,000	18,000
享和2年戌	1802	65,430	17,105	44,435	3,890	61,920	60,000	45,000	15,000
享和3年亥	1803	72,770	20,625	48,090	4,055	66,510	65,000	45,000	20,000
文化元年子	1804	73,925	22,275	46,865	4,785	55,790	55,000	40,000	15,000
文化2年丑	1805	68,590	17,935	45,330	5,325	50,870	52,000	40,000	12,000
文化3年寅	1806	71,555	17,350	49,010	5,195	49,440	55,000	40,000	15,000
文化4年卯	1807	81,375	19,030	56,945	5,400	63,900	65,000	50,000	15,000
文化5年辰	1808	82,730	17,885	59,680	5,165	50,218	40,000	25,000	15,000
文化6年巳	1809	79,866	21,055	51,470	7,341	50,383	47,000	47,000	

出所) ①「伯州買方控」（三井文庫所蔵史料 別1722）。②「京本店木綿御注文帳」（鳥取県立博物館所蔵史料 西紙屋資料35）。

注) 寛政5年から同7年までの注文数は②史料から作成した。

本店で算出した江戸・大坂の各営業店の必要木綿量と、京本店から買宿への伯州・雲州木綿注文数である。寛政八年から文化六年は三井文庫所蔵史料に基づいて作成し、寛政五年から七年分は西紙屋の史料にある木綿注文帳³⁾で補った。現時点で、当該期の木綿注文数を明らかにできたのはこの一七七分のみである。

第4表のA列が木綿方で集計した各店舗の必要木綿量合計、B列からD列がそれぞれ江戸芝口店・江戸向店・大坂本店の必要木綿量、E列が京本店が在庫や不足などの調整を行い最終的に確定した木綿注文数、F列が京本店から西紙屋への注文数、G・H列が伯州と雲州への注文内訳で、G列が伯州木綿、H列が雲州木綿である（後述するが雲州木綿は寛政十二年（一八〇〇）に買宿契約を結び、享和元年（一八〇一）より直仕入を開始する）。

各店舗の必要木綿量をみてみよう（A～D列）。寛政八年（一七九六）以降の各店舗の必要木綿量が

わかる。この期間、江戸向店（C列）が圧倒的に多い。江戸向店は江戸の三井越後屋営業店のなかで主に木綿製品の仕入・販売を行う店である。寛政八年の三万反余から増加傾向にあり、文化五年（一八〇八）には約五万九〇〇〇反余となっており、全ての年で各営業店の合計の半数以上を占めている。次いで多いのは江戸芝口店（B列）である。漸増傾向にあるが、江戸向店の半分にも及ばず、文化元年（一八〇四）の二万二〇〇〇反余が最大である。大坂本店（D列）はさらに少なく、三〇〇〇反から五四〇〇反の間を推移している。

各営業店の必要木綿量合計（A列）は年により若干の高下はあるものの、寛政八年の五万一〇〇〇反余から漸増傾向にあり、文化五年には八万二〇〇〇反余となっている。これは各店舗からの伯州木綿の需要増大によるものだろうが、仕入不足や京本店からの下し不足（廻送不足）を見越しての各店舗からの増量注文も含まれていると思われる。各店舗の必要木綿量からみる限り、江戸向店が木綿注文数の増加傾向を牽引しているのであり、京本店を介した伯州木綿・雲州木綿の仕入において、主要な送り先は江戸向店だったのである。

第4表からみてとれる各店舗の伯州木綿注文数の増加は、それぞれの店舗の抱える事情と、社会経済状況の変化と深くかかわっていた。次章以降、この注文数増加原因について、寛政年間において伯州木綿注文増加を牽引した江戸向店と、木綿仕入体制を大きく変更した大坂本店から考察する。

(1) この仕入不足分は具体的にどのような不足分か、現時点で明らかにできていない。今後の課題としたい。

(2) ここで署名しているのは浅井弥右衛門（京本店支配）、山田茂助（同上）、松田久兵衛（同上）、藤田藤七（京本店役頭）、清水善五郎（同上）、忠七（京本店の小椋忠七カ、享和三年段階で役頭、寛政十年段階の役職不明）の六名である（「店々

役人名鑑」三井文庫閲覧室配架資料）。

(3) 「京本店木綿御注文帳」(鳥取県立博物館所蔵史料 西紙屋資料三五)。これは寛政五年(寛政十一年・享和元年)の三井越後屋から西紙屋への木綿注文帳である。ここには京本店手代を差出とする注文と、大坂本店手代を差出とする二系統の注文が綴じてある。

二 江戸向店と伯州木綿

1 江戸向店と勢州木綿

江戸向店はこの時期、廉価木綿の仕入を模索する段階に入っていた。江戸向店は先述のように、江戸三店の中で主に木綿の仕入・販売を手がける部門であった。そして、従来江戸向店が仕入れていた主力木綿は勢州木綿であった。

江戸向店では三井越後屋松坂店(越後屋則右衛門店)から勢州木綿を仕入れていた。一般的に、江戸の木綿問屋は勢州木綿を松坂の買次問屋から仕入れていたが、向店の勢州での仕入先は松坂店のみであった。松坂店の木綿集荷形態は在地仲買から買うのが六割、坪買(生産者に前貸金を与えて直接仕入れる「坪廻り直買」)が四割であった。仲買からの仕入は口銭がかかり廉価仕入が困難になるため、江戸木綿問屋は買次問屋に坪買を積極的に行わせていた。しかし、松坂店の木綿は高く、文化年間に四日市の買次問屋・伊藤作兵衛に勢州木綿の注文を出し松坂店の木綿と比較したところ、伊藤作兵衛の仕入れた木綿の方が廉価であった。このため、江戸向店では文化年間以降伊藤作兵衛からの取引を増加させていった⁽¹⁾。本稿では寛政年間をとりあげるため、伊藤作兵衛への切替以前の状況である。

第1図は宝暦十一年(一七六一)から文化六年(一八〇九)までの、江戸向店の主要木綿仕入額(銀高)である。江

第5表 江戸市場の木綿売値段
（寛政3年8月）
（単位：匁/1反あたり）

品目		価格
大坂木綿	上	河内白木綿 12.000
	中	紀州白木綿 7.140
		阿州木綿 ー
		備前木綿 ー
		播州木綿 ー
	下	池田白木綿 3.240
周防白木綿 3.070		
淡州白木綿 ー		
尾州白木綿	上	三番 12.223
	中	八番 8.012
	下	道詰 6.107
三州白木綿	上	古新 8.050
	中	問銘 6.176
	下	ー
勢州木綿	綿入地嶋木綿	17.500
	単物地嶋木綿	13.790
関東木綿	岩附白木綿	9.090
	野州真岡木綿	13.640

出所)「木綿直段高直綿相場=不約合=付
從御公儀直段御糺一件之控」(三井文
庫所蔵史料 本1174-2)。

戸向店が仕入れていた主要商品は勢州木綿、大坂木綿（大坂に集荷される木綿）、奥州木綿、尾州木綿・三州木綿であり、仕入銀額の上では勢州木綿が最有力商品であった。明和から安永年間において尾州・三州木綿の仕入額が増加する時期はあるものの、勢州木綿は仕入額が最も多く、特に安永八年（一七七九）から寛政七年（一七九五）にかけて突出している。この仕入額増大は安永八年に突如として起こり、仕入額の減少は寛政四年（一七九二）から発生し、寛政八年頃に激減している²⁾。その後、仕入額は増加するものの、安永から寛政頃までほどの銀額まで上昇することはない。いずれにしても勢州木綿は向店の仕入額面において主力の位置を占め、特に寛政年間の前半には他の木綿を圧倒していたのである。

ところで、寛政年間の江戸市場における木綿相場から、勢州木綿の位置を確認してみよう。第5表は寛政三年（一七九一）三月、幕府による物価調査の際、式拾番組大伝馬町木綿問屋の行司四軒と三拾六番組木綿問屋の行司四軒が町奉行所に提出した江戸における木綿売値段である（価格のないものは史料中に「売切申候而所持無御座候」とされているものである）。問屋仲間は幕府に対して売値段を低く記載して提出するであろうから、数字そのものの史料批判は必要だが、産地別の価格差の参考にはなる。勢州木綿は一反あたり一七匁余と一三匁七分余であり、向店で仕入れる尾州木綿は六匁から一二匁余、三州木綿も六匁から八匁程度である。その他、大坂の河内木綿一二匁や関東の真

岡木綿の一三匁六分余など単価の高い木綿はあるものの、勢州木綿は他所木綿よりさらに高単価であった。

木綿単価の高さは札掛率（利益率）の低さに直結する。江戸向店の仕入品の札掛率を寛政期、文政初年、天保末年の三期で比較すると、関東絹と越後縮布の札掛率が高く、木綿類は低いこと、関東絹のなかでも品質の劣る山物類も札掛率が低いこと、天保期には関東絹の札掛率も低く抑えられていること、が明らかにされている。⁽³⁾ 勢州木綿の札掛率は寛政期に二・六％、文政期に三・九％、天保期に二・一％であり、大坂木綿の四・四％、四・二％、三・五％、尾三木綿の三・三％、五・八％、三・〇％に比べても低いのである。

三井越後屋京本店の重役手代も勢州木綿の札掛率の低さを重大な経営問題として受けとめていた。

〔史料一〕⁽⁴⁾

（前略）伊勢島^(四、五)之方、札掛^(三)ツサ歩ニ在之、右ニ而ハ不詰故大坂店ニ而大和島買セ仕下候処、向店札掛^(七、八)エチ歩ニ在之、扱又伊勢晒島俗衣地^(浴カ)向店札掛^(三)マ歩ニ有之、右を岐阜織ニ而京より仕下札掛^(一、二)イイセニ在之、然者ウ歩^(九)下直右等之所、全駄勢州店仕入不格合ニ在之候、往古綿店建ニ候ハ、何れ之方ニ而茂下直之方買方可有之、是等之処当時相緩ミ在之様相見え候、（後略）

〔史料一〕は寛政十年（一七九八）に作成された京本店の重役手代・向崎吉郎兵衛の記録であり、木綿の取扱いについて述べている箇所の一部である。吉郎兵衛は、他所木綿に対する勢州木綿の札掛（利益率）の低さを問題にしていた。すなわち、伊勢島木綿の札掛は四から五％（ツサ歩）である。よろしくない（「不詰故」）ので大坂本店で大和島木綿を仕入させて江戸に下したところ、向店の札掛は七％から八％（エチ歩）になった。また、伊勢晒島浴衣地の札掛は三％

（サ歩）である。京本店から下す岐阜織に切替えたら札掛は一一％から一二％（イイセ）となった。伊勢晒島浴衣地の利益率は岐阜織に対して九％（ウ歩）低く、松坂店で仕入れるには適切な商品ではない（「不恰好」）、というのである。吉郎兵衛のあげた数字は先述の札掛率と比べてやや高いようであるが、京本店の重役手代の目から見ても、江戸向店の勢州木綿仕入は高値であり、同じ品質の製品を同じ価格で売る場合、勢州木綿は他の商品よりも利益部分を小さく設定することしかできなかったのである。吉郎兵衛は以上の比較を踏まえて、江戸向店が元々綿店だったことに言及し、その才覚を活かしていずれの仕入地でも安値のものを仕入れるべきであること、安値の仕入へのこだわりは現在緩んでいるように見受けられることを述べ、向店に対して経営改善を提言している。

折しも、寛政年間の三井越後屋は大丸の現銀売が繁昌している状況を脅威として捉えており、大丸を相手とした販売競争（安売り）が激化しつつあった。⁵⁾ 値引きしてもなお利益の出る低廉な商品を仕入れる必要があったのである。また、木綿は大衆衣料であり、庶民を相手とした店前売による薄利多売の現銀収入を見込める商品であり、三井越後屋では寛政年間のこの時期、木綿商品の販売を手厚くしようとしていたとみられる。このような状況にあって、当該期の江戸向店は勢州木綿からより廉価な木綿仕入を模索する段階にいたったのである。

2 伯州木綿・関東木綿への転換

京本店と江戸の各営業店は勢州木綿から廉価商品へ的一部切替を模索し、代替として伯州木綿と関東木綿を想定していた。

〔史料⁶〕

其御地(京本店)よりも勢州へ御報被仰遣候通、近年伯州木綿相調候丈ケ伊勢木綿相減し、其外江戸近在より織出し候嶋木綿風合宜、直段之処松坂より余程下直ニ相当り候ニ付、右之品手(江戸向店)前ニ而随分出情相調、是迎も夫丈ケ注文高相減申候

〔史料二〕は寛政四年の史料で、京本店から江戸の店舗に対して出された経営改革案に対する江戸三店の回答の一部である。作成者は松島林右衛門（江戸向店・大元締、江戸本店兼勤）である。この部分は『三井事業史』などでも取上げられ、勢州木綿から伯州木綿・関東木綿への切替の説明に用いられているが、本稿でも改めて確認しておきたい。

まず冒頭部分から、京本店が松坂店に対して通達した事項を江戸向店でも追認していることがわかり、これは京本店から提示されたプランであることがわかる。その通達内容は、近年伯州木綿の仕入を増やした分伊勢木綿の仕入を減らす、さらに江戸周辺で生産する嶋木綿（関東木綿）も品質（風合）が良く、値段も松坂より安価であるため、これも江戸向店で仕入れた分だけ伊勢木綿の仕入を減らす、というものである。これは確認できる限り、江戸向店が京本店の指針に同調し、勢州木綿から伯州木綿・関東木綿への一部転換を図っていたことを示す最初の記事である。寛政四年段階で実際に伯州木綿と関東木綿への切替がなされていたかわからないが、この時点で、京本店と江戸向店では、江戸向店の木綿仕入を、勢州木綿から品質も価格も手ごろな伯州木綿・関東木綿に比重を移す方針を決めていたといえよう。特にこの方針確定には京本店の意向を強く反映していることがうかがえる。

寛政八年（一七九六）から文化六年（一八〇九）までの向店の必要木綿数（前掲第4表C列）は、前述の通り、江戸向店分として寛政八年段階で三万九五〇反を必要とし、以降若干の増減はあるものの、全体的に漸増傾向にあり、文化五年（一八〇八）には五万九六八〇反になっている。一二年の差があるとはいえ、二万反の増加である。下し不足など

の仕入不足を想定して必要以上に計上していると考えられるが、京本店に対して大量の伯州木綿を要求するようになるのである。

- (1) この段落の勢州木綿の説明は『三井事業史』（本篇第一巻、四二一～四二八頁）に基づく。
- (2) この極端な増加要因は勢州木綿そのものや市場動向に起因する可能性もあるが、三井家の内部的要因の可能性も考慮する必要がある。三井家はこれまで家訓である「宗三遺書」の、身上一致の原則に則って経営を行ってきたが、安永三年（二七七四）、経営不振のなかで本店と両替店の経営状況の違いや、同苗間の確執が重なり、本店・両替店・松坂店の三グループに分離し、それぞれを三井十一家で分割する事態に陥った（安永持分け）。持分けは寛政九年（二七九七）の惣同苗の再結集、各店の統合（寛政一致）まで続いた（『三井事業史』本編第一巻、三二八頁、同資料篇第一巻、一九七三年、八〇五～八一〇頁）。持分けの時期は、江戸向店の勢州木綿仕入額増加時期と合致しており、勢州木綿を扱う松坂店に対して、元々綿店であった向店が何らかの関係を持っていた可能性も否定できない。ただ、現時点で判断材料が無いため、この問題は稿を改めて検討したい。
- (3) 賀川隆行「近世後期の越後屋の経営」（『三井文庫論叢』九、一九七五年、四三～四六頁、のち前掲賀川著書、二九五～二九六頁）。
- (4) 「向崎玄甫商盛衰旧記」（三井文庫所蔵史料 追一五九三）。寛政十年作成。手代としての心得や商売に関する戒めなどを記載した記録である。
- (5) 江戸での販売競争や、江戸での現銀売励行については『三井事業史』でも触れられている（『三井事業史』本篇第一巻、三五六～三六〇頁）。この問題については今後掘り下げて考察する予定である。
- (6) 「松島氏示合書夫々熟談之上返答書」（三井文庫所蔵史料 別六四六～四九）。

三 大坂本店と伯州木綿

1 大坂本店と河内木綿

一方、寛政年間の三井越後屋大坂本店では、木綿仕入において、江戸向店とは異なる問題を抱えていた。大坂本店は京本店から送られてきた商品を販売する一方で、西国木綿の仕入・販売を行う営業店であった。大坂本店は大坂木綿問屋東堀組に属し、大坂木綿問屋として木綿を仕入れ、一部を江戸向店に送り、大半を大坂で販売していた。大坂本店で扱う仕入高の三分の二が太物類（木綿類）であった。大坂本店では摂津・河内・和泉をはじめとして、播磨・備前・讃岐・伊予・阿波・伯耆の西国木綿を扱っていたという⁽¹⁾（河内・播磨・備前・阿波・伯耆の木綿直仕入については本稿で述べる）。

この時期の大坂本店では、京本店や江戸向店における木綿現銀売の積極的展開に呼応して木綿方の仕法改革を行うなど、木綿の仕入・販売を積極的に展開していこうとする動きがみられる⁽²⁾。その中で、河内木綿の直仕入をめぐって、他の木綿問屋に対して劣勢に立っている状況が問題になっていたのである。

河内木綿は元来糸太地厚の白木綿が主製品で、暖簾や浴衣地等として優れた木綿であり、近世中後期に生産量のピークを迎え、天保年間には一〇〇万反を生産していた⁽³⁾。向崎吉郎兵衛は「河内白嶋木綿者大坂土地第一之評判売代物故、是者何分直買所相立申度旨先達而より申談と雖、今ニ其趣意相立不申、是者立度物ニ候⁽⁴⁾」と記しており、河内で生産する白木綿・嶋木綿は大坂第一の産物であるため、直仕入所の設置を提唱し続けているが未だ設けられていないことを問題とし、河内木綿の直仕入を展開すべきことを主張していた。

前掲第5表においても大坂木綿の中で河内白木綿は「上」であり、紀州・阿州・備前・播州の「中」、池田・周防の「下」などに対して、江戸市場においても評価が高かった。当然、三井越後屋だけでなく他の都市問屋も、人気産物河内木綿に目を付けていた。三井越後屋では他店の河内木綿仕入体制を次のようにみていた。

〔史料三〕⁽⁵⁾

村印店方ハ河内ニ直買所相立在之、扱又夷屋店方ハ大坂堺筋ニ木面類一卷買方・仕入方店在之、是ハ袴屋仁右衛門⁽⁶⁾同事之様子ニ相見え候

〔史料三〕も向崎吉郎兵衛の記録である。大坂本店が河内木綿の直仕入を検討している間にも、大丸は生産地に木綿直仕入所を設け、恵比須屋・袴屋仁右衛門は堺に木綿類全般を扱う仕入店を設け、積極的な河内木綿の直仕入を展開していた。大坂における都市問屋資本の河内木綿仕入の一潮流として、大坂周辺地域に仕入拠点を設けて直仕入を行う動きがあったのである。吉郎兵衛は、三井越後屋大坂本店は本来呉服屋であり、木綿類の営業努力がなおざりになっている（「往根呉服店之事故、木綿類氣之人、メ方薄ク成行所在之」⁽⁷⁾）と評価している。大坂本店は同地において西国木綿の仕入を行ってきたが、この時期、特に河内木綿の直仕入をめぐる、競合店である大丸や恵比須屋に対して大きくおくれを取っていたのである。前稿でも指摘したように、京本店の手代が度々業務支援のために下坂している⁽⁸⁾。伯州等の木綿直仕入で蓄積した京本店のノウハウを提供して、大坂本店の仕入改革を促進しようとしたのであろう。

河内木綿は、大坂・在地の木綿仲買による仕入活動も盛んであった⁽⁹⁾。

〔史料四〕¹⁰⁾

一河内直買之儀者、大坂中買日々に江入込坪方相廻り、木綿出来無之内、敷銀等いたし相調候、然ニ手前折々買方ニ罷越候共、中々大数恰好克者手ニ入かたく趣ニ候へ者、先直買者相止め、只々買元備相建、本形を以相場高下相糺買入候義肝要之事

一河内白嶋共、先頃より在々罷越、買寄せ手広く被致候方及見聞候処、左之通

久宝寺表町

河内屋小兵衛

八尾(東郷カ)

とふご地蔵前

瓦屋幸介

八尾(木カ)

夜着村

又左衛門

三宅村

久右衛門

同村

利左衛門

右五軒共手広被致取引候様子ニ相聞へ候へハ、買旬相考折々罷越、相調可申積りニ御座候、其余迎も追々見聞候得者罷越、何れ成共本形持参致相調可申候

〔史料四〕は大坂本店の木綿方（木綿仕入部門）の仕法改革の一部であり、河内木綿の直仕入の可否を検討した結果を記したものである。大坂本店では、河内木綿の流通状況について、次のようにみていた。すなわち、「大坂中買」が

河内の在々へ入り込んで「坪方」（生産地・生産者）を回り、木綿を織る前に敷銀を渡し、木綿を織らせたうえで仕入れる前貸し形態で織元を掌握している。このような状況では、三井越後屋の奉公人が仕入に訪れても、品質・価格面ともに手ごろな（「恰好克」）木綿を大量に入手することは困難である、という。三井越後屋が河内木綿仕入に参入するなら、直仕入ではなく潤沢な「買元備」（仕入準備金）を用意して三井越後屋が必要とする価格見本（「本形」）をもとに価格を見極め、仲買らから仕入れるのが最善の方策である。大坂の河内木綿の仲買らは織元に対する資金前貸により木綿仕入を行っており、三井越後屋が仲買らの商圏に食い込んで直仕入を行うのは困難だったのである。

そこで、大坂本店は右のような大坂の仲買ではなく、在地の仲買に着目した。「史料四」では大坂本店の手代が現地へ赴いて見聞した結果、木綿仕入を手広く行っている仲買として、久宝寺表町の河内屋小兵衛、八尾とぶご（東郷カ）村の瓦屋幸介、夜着（八尾木カ）村の又左衛門、三宅村の久右衛門と利左衛門の五軒に注目している。久宝寺村・東郷村・八尾木村はいずれも八尾近傍の村々であり、この地域は河内木綿生産の中心地であった。特に、八尾・久宝寺には八尾組、久宝寺組という木綿仲買仲間があり、大坂で河内木綿仕入を仕入れる上町組（上町毛綿仲買組仲間）と対等な存在であったという⁽¹⁾。また、三宅村は右の村々と大和川を挟んで対岸に位置しており、三宅木綿というブランドを持つ木綿生産地で、幕末には三宅組という仲買仲間も存在した⁽²⁾。

「史料四」では大坂本店では、仕入時期を見計らって手代をこの五軒に派遣して木綿を仕入れたいこと、この五軒以外にも見聞の上で仕入に適していると判断すれば新たに仕入先を増やすことを提案し、現地に価格見本（本形）を持参して仕入を行うようにすると主張している。大坂本店では、現地で手広く商売をしている仲買を選び、潤沢な資金力を背景に規格・価格面で主導権を確保しながら、河内木綿の相場を見極めた上で、買い付ける方針を採用したのであった。

以上のように、寛政年間の三井越後屋大坂本店は、河内木綿の直仕入において、他の大店同様の直仕入所の設置に出

遅れた。大坂本店では河内木綿の仕入・販売で他店と対抗して直任入体制を構築するのではなく、価格面において競合他店に対抗しうる廉価木綿の直任入体制の構築を目指したのである。

2 大坂本店の伯州木綿の直任入模索

寛政七年（一七九五）、大坂本店は木綿方の仕法改正を行い、他店に対抗して独自の木綿直任入の準備を開始した。前掲「史料四」もこの中で練られたプランの一つである。

大坂本店がまず注目したのは伯州木綿であった。大坂本店は寛政七・八年の二度、伯州木綿直任入のために京本店の買方役に同道する形で手代一名を派遣した。この派遣で大坂本店からの買方役は木綿九九〇〇反余を仕入れている。しかし、確認できる限り、京本店と共に買方役を送ったのは二回のみであり、これ以降大坂本店は買方役の派遣を行っておらず、第1表に見るように伯州木綿のうち、両面染・更紗地などの品目については京本店への注文によって仕入れていた。買方役を二年間だけ派遣し、その後派遣しなかったのは、大坂本店が京本店買方役に同行するかたちで買方役を二年間派遣して仕入の経験をさせることで、伯州木綿の品質や西紙屋による仕入の実態について直接把握させるためであろう。この実態把握と京本店との連携によって、大坂本店は伯州木綿のうち高級品については京本店に注文し、以下に述べる生下し地・晒地など廉価品については直接西紙屋に注文する態勢をとることにしたのである。

前掲第1表で、芝口店と向店が寛政九年・十年に注文した木綿は生下し地・晒地であるが、大坂本店は全く注文していない。これは同店が生下し地・晒地を仕入れていないのではなく、西紙屋に対して直接注文を行っているためである。第6表は大坂本店から西紙屋への注文数であり、寛政八年（一七九六）から同十一年（一七九九）、享和二年（一八一〇）の五ヶ年分残っている。寛政九年をみると、生木綿六五〇〇反（ここでの生木綿は第1表・第2表の生下し地

第6表 大坂本店から西紙屋への木綿注文数

	生木綿	晒地木綿	紅地木綿	合計
寛政8年辰	5,000	1,300	1,500	7,800
寛政9年巳	6,500	1,500	2,000	10,000
寛政10年午	3,000	1,000	1,000	5,000
寛政11年未	2,000	1,000	—	
寛政12年申	—	—	—	
享和元年酉	—	—	—	
享和2年戌	3,000	1,500	1,500	6,000

出所)「京本店木綿御注文帳」(鳥取県立博物館所蔵史料 西紙屋資料35)。

に相当)、晒地木綿一五〇〇反、紅地木綿二〇〇〇反の、合計一万反の注文を行っている。廉価で大量仕入できる生木綿や晒地木綿については大坂本店独自の仕入を行い、高価で少量仕入に留まる更紗地・両面染などについては京本店に依頼して一括発注していたのである。京本店も大坂本店の直接注文を問題としていないことから、京本店の容認する行動だったといえよう。

寛政年間の大坂本店は伯州木綿の直仕入体制を採用した。この時期、伯州木綿だけでなく、阿州木綿や備前木綿など、西国木綿の直仕入体制も同時並行的に構築していった(阿州木綿・備前木綿については第六章で述べる)。また、開始時期は不明だが、大坂本店では播州長束木綿の直仕入も行っていたようである。『姫路市史』所収の長束木綿関係史料に次のような記載がある。

〔史料五〕⁽¹⁴⁾

一大坂三ツ井店袴屋善兵衛杯之類店方仕入屋八九軒余も長束木綿直キ買注文御座候、是ハ往古より長束問屋之内ニ家々之得意として銘々注文を受、毛綿上中下其外口々印名を付直段相定積為登申候代銀ハ早速皆銀差下呉申候

これは天保七年(一八三六)の記事だが、大坂問屋が長束木綿を注文する様相がわかって興味深い。大坂三井本店や袴屋善兵衛などの店と契約関係にある「仕入屋」が八、九軒あり、大坂問屋はそれぞれ特定の「仕入屋」に直仕入注文をしていた。これは往古から長束木綿問屋はそれぞれに得意先の大坂問屋から注文を受けてきた

もので、毛綿の等級設定（「上中下」）ほか、種類ごとに符号（「印名」）を設定し、仕入価格を決めて積み登せていた。代銀は速やかに全て銀にして差下している。⁽¹⁵⁾ 大坂本店では長束木綿も現地問屋に注文を送って必要な木綿を直仕入をしていたのである。⁽¹⁶⁾

大坂本店は寛政年間以降、伯州をはじめ、阿波・播磨・備前など西日本の木綿生産地帯からの木綿仕入体制を整備していった。阿州木綿・備前木綿、そして播州木綿は、いずれも前掲第5表において大坂木綿の「中」に位置づけられている木綿であった。「上」級の河内木綿の安価入手が困難な状況下において、「中」級の木綿を確実に掌握するよう活動していたともいえるだろう。このような状況下にあつて、大丸など他店の入り込んでいない伯州は三井越後屋にとって重要な直仕入地に位置づけられていたのである。

(1) この段落の大坂本店の説明は『三井事業史』（本篇第一巻、四三二頁）に基づく。

(2) (8) 前掲下向井論文二〇一二年（第三章脚注（5）、四六〇〜四七頁）。

(3) 武部善人「撰河泉の綿業」『日本産業史大系6近畿地方篇』東京大学出版会、一九六〇年、同「河内木綿」『国史大事典』。

(4) (5) (7) 「向崎玄甫商盛衰旧記」〔三井文庫所蔵史料 追一五九三〕。

(6) 袴屋仁右衛門は木綿問屋。「浪速丸綱目」〔三井文庫所蔵参考図書 C二四二一〜二四〕では大坂道修町二丁目の江戸積綿問屋とされている。

(9) 河内木綿をめぐる在郷商人の研究は多く、これまで特に都市特権商人との関係の中で論じられてきた（古島敏雄・永原慶二『商品生産と寄生地主制』東京大学出版会、一九五四年、前掲八木著書）。大坂における河内木綿の集荷は上町毛綿仲買組仲間（都市特権商人）が担っていたが、独占性の希薄な存在であり、河内木綿の生産者農民には村内や近在の在郷

- 商人、在郷町商人、大坂から入り込む商人、諸国から入り込む商人と多様な販売先があったという（今井修平「近世後期河内における木綿流通の展開」脇田修編『近世大坂地域の史的分析』御茶の水書房、一九八〇年）。
- (10) 「江戸向店会所大坂店木綿方規矩」（三井文庫所蔵史料 別五）。これは『三井事業史』（本篇第一巻、四二二～四三三頁）でも引用されている。
- (11) 前掲今井論文、二六三～二六四頁、武部善人「在郷町における河内木綿の流通過程」（『河内木綿史』吉川弘文館、一九八一年、一〇八～一一四頁）。
- (12) 前掲武部論文一九八一年、一一二頁、「三宅村」（『日本歴史地名大系二八 大阪府の地名』平凡社、一九八六年）。
- (13) 「伯州買方控」（三井文庫所蔵史料 別一七二二）。この点は拙稿二〇一二年、三七頁、四六～四七頁でも指摘。
- (14) 「長束木綿売買仕来書案」天保七年二月（『姫路市史』第一〇巻、史料編近世一、一九八六年、六四一頁）。長束木綿の流通については西向宏介「長束木綿と藩専売制」（『加古川市史』第2巻本篇Ⅱ、第七章第一節、一九九四年、五七四～六二二頁）にくわしい。
- (15) この史料の別の廉書において大坂播州問屋への荷物送りの記事がある。「荷物ニ送り状并ニ別紙銀為替請取手形相添へ、船頭へ相頼積送申候、則木綿入津之上千反ニ付銀四貫五百目、且五貫目ニ而も右手形之通内銀早速船頭共へ差下し呉申候」とあるように、荷物の積み登せに際して船頭に送り状と為替手形を渡し、木綿入津の上で、手形の通りに船頭に銀を渡して下す形式を取っていた。
- (16) 三井越後屋の播州木綿仕入についてはこれまで詳述されておらず、今後明らかにされるべき課題であろう。

四 仕入注文数急増に伴う問題

これまでみたように、江戸・大坂の各営業店の伯州木綿必要量は、寛政八年（一七九六）以降増加傾向にあった。各店舗の伯州木綿需要増大が、実際の伯州木綿注文数にも反映されたのである。京本店から西紙屋への注文も増大した。第4表で改めて確認してみると、京本店から西紙屋への注文数（F列）で目立つのは、寛政七年の注文数七万二〇〇〇反である。これは前年注文数の一・八倍にのぼる極端な増加であり、また第4表の期間において最大の注文数である。これ以降の注文数は四万反から七万反の間で推移しているのであり、寛政七年以降、急激に木綿注文数が増加したことがわかる。以下、本章では、京本店から西紙屋への木綿注文増加と、それに伴って生じた問題を明らかにしていき、次章において、その対策について具体的にみていく。

1 仕入不足の発生

すでに述べたように、寛政年間の京本店では、江戸向店の大量木綿注文や、大坂本店の木綿直仕入体制の整備にともなう伯州木綿需要の増大により、現地買宿西紙屋への注文数も増加していった。しかし、同時に京本店では伯州木綿仕入をめぐる仕入不足の問題も発生していた。

〔史料六〕⁽¹⁾

覚

（寛政八年）
一当年、伯州買方七万式仙反之所、四万反位ならで者買入出来不申趣申来候、依而不足相調候所左之通

生木綿 三万反

右之通ニ有之候、然ニ阿州木綿元来綿性宜ク、故ニ哉染仕成上々ニ而格合宜ク相見え候へ者（規矩）（二）五、六（分）イサカ入引、（五）佐

迄ニ買入出来候ハ、右不足丈ケ相調申度候得共、大数之義ゆへ迎も難調被存候、依而右員数半減通相調申度御相

談申上候、以上

（寛政八年）
辰三月

〔史料六〕は京本店木綿方の記録で、寛政八年三月段階の伯州木綿の仕入状況と課題を示し、京本店の重役らに対応策を相談した記事である。これによると、寛政八年の伯州木綿仕入は七万二〇〇〇反だが買宿からは四万反くらいでなければ仕入できないと伝えてきたこと、不足分は生木綿全体で三万反であったことがわかる（先述のように第4表で京本店から西紙屋への寛政七年発注分も七万二〇〇〇反であり、この記載と合致する）。そして、その対応策として木綿方の担当者は、阿州木綿の性質が良いことから、染・仕上がり（「仕成」）の状態と品質（「恰好」）が良く、阿州木綿の一反あたりの基準値（「キク」）から一反あたり一匁五分から六分引きの五分匁以下（ここから、阿州木綿は一反あたり六匁五分から六匁六分程度と考えられる）で仕入れできるならば不足分だけ阿州木綿を仕入れたいこと、しかし三万反もの阿州木綿の調達をいきなり行うのは難しいため、三万反から半減させて一万五〇〇〇反を仕入れるようにしたいことを京本店の重役に相談している。伯州木綿は概ね一反あたり五匁前後であり（第六章の雲州木綿のところでも詳述）、阿州木綿の中から比較的安い木綿を仕入れようとしていたのである。

三井越後屋各営業店からの注文が伯州木綿に集中した結果、買宿西紙屋は自身の集荷能力をはるかに超える注文数を

受け、西紙屋の集荷限界能力が四万反程度と露顕し、三万反の下し不足が予測される事態に陥った。ここでの京本店から買宿への注文は、買宿の集荷能力を大きく逸脱したものであったのである。

2 仕入不足発生の原因

仕入不足発生の原因は仕入の統轄を行う京本店にあった。寛政七年九月、京本店木綿方の土方伊助（寛政七年段階で上座役）が金五〇〇疋の褒賞を受けており、その理由が「伯州木面仕入方出情相勤候ニ付、江戸気向入り大数注文申参手柄」⁽²⁾であった。九月は京本店で注文を作成する時期にあたる。先述のように、京本店の方針は廉価木綿への転換、特に伯州木綿の重点化であり、土方伊助は京本店の意向に沿って江戸で好まれている（「気向入り」）木綿の大量注文をしたのである。第一章において、木綿注文数確定にあたり、各店舗の必要木綿量を過去二ヶ年分の注文実績で決定すると述べたが、寛政七年にあっては前年の実績を踏まえ、木綿方の判断で大量注文を行ったことを示唆している。先述のように、寛政七年は七万二〇〇〇反を注文している年であった。しかし、現地西紙屋は注文増加に対応することができなかった。木綿注文数を調整すべき木綿方役人は、現地の仕入限界量を把握できておらず、大量仕入実施に向けた買宿との事前調整もできていなかったのである。

京本店は伯州への仕入重点化方針を維持しつつ対応を取らざるを得なくなった。まず浮上したのが、「史料六」でも述べられている阿州木綿による不足分の補填であった。京本店は大坂本店の木綿仕入改革に便乗する形で、阿州木綿の直仕入をめざしたのである（阿州木綿仕入は第六章で述べる）。

3 角屋直三郎の買宿任命

江戸向店や大坂本店での伯州木綿仕入増強にあたり、京本店でも準備を進めていたと思われる。大量注文を行う寛政七年、これまで因州青谷で西紙屋の代買として木綿仕入を担当していた角屋直三郎を買宿に格上げし、青谷木綿の直仕入を一手に任せることとした。青谷では高品質・高価格の木綿を織り出していた。京本店は西紙屋を介して青谷木綿にてこ入れしており、「手前伏機同前ニ而八歩通は手前へ買取申候³⁾」とあるように、青谷の生産者に生産設備の供与や技術指導、また前貸による繰綿提供を行い、青谷で生産する木綿の八割程度を仕入れていた。

〔史料七〕⁴⁾

一 因州青屋^{青谷}、赤崎より者八里半隔り、角屋直三郎と申仁旅籠屋被致慥成方ニ付、於買宿被定木綿相調申、右ニ付而者金子も送り候事故、請人相立証文等紙佐方へ取置、此方買方ニ参り相調候義ニ御座候、然ニ右青屋木綿追々買方相増、口銭高も加増甚悦被申、尤至極実躰成仁ニ有之、此度挨拶并ニ京見物旁登り被申候義ニ御座候

一 右青屋買方之所、買役之者斗罷越荷造等迄彼方ニ而仕立差為登之事故、紙佐方頓と手ヲ放、夫故口銭之所、右青屋買丈ケ御除被下候様佐兵衛被申候ニ付、卯秋^{寛政七年}より彼方口銭相除、角屋方へイ歩口銭勘定相立遣し候義ニ御座候

〔史料七〕は寛政八年十月に角屋が上京してきた際の記事である。角屋直三郎は元来旅籠屋を経営していたが、買宿西紙屋の指示を受けて木綿の仕入を行っていた。角屋は仕入金を西紙屋を経由して受け取り、角屋は請人を立てて証文を書き、西紙屋に提出していた。角屋はもともと西紙屋からの仕入金をもとに仕入活動を行っていたことがわかる。

この時期、青谷木綿の仕入量が増え、角屋の口銭収入も増大していた。一方、青谷での木綿仕入は三井越後屋の手代が現地に赴き、荷造り準備をして大坂に登せているため、西紙屋は青谷木綿の仕入に関与しなくなっていた。それでも

口銭は一度西紙屋が受け取る形態になっていたため、京本店は寛政七年以降、青谷木綿の仕入にかかる口銭収入を西紙屋を介さず、角屋へ木綿仕入額の1%（一步）を直接渡すようにした。買宿任命により、角屋は口銭直接獲得の特権を得たのである。

逆に、西紙屋は青谷木綿以外の木綿仕入に注力できるようになった。これらの動きは、伯州木綿の注文増加に向けた京本店としての事前準備ととらえることができるであろう。しかし、先述の通り、西紙屋はいきなり舞い込んだ大量注文に対応できなかったのである。

(1) 「用事留」(三井文庫所蔵史料 本七七七)。京本店木綿方の作成した記録。木綿類の仕入・加工、店舗で扱う風呂敷・手拭の注文についての記載が多い。

(2) 「内永書」(三井文庫所蔵史料 本一四〇)。

(3) 「尾印勤要記」(三井文庫所蔵史料 本一五一六)。

(4) 「用事留」寛政八年十月記事(三井文庫所蔵史料 本七七六)。

五 仕入不足解消策の模索

1 京本店の現状分析

寛政八年(一七九六)に仕入不足という状況に直面した京本店は対応に乗り出す。寛政九年、京本店は西紙屋に対し、集荷地域における木綿生産量と西紙屋の仕入の占める割合を報告させた。これを一覧にしたものが第7表である。寛政

九年段階における西紙屋の集荷地域内の木綿織出し数（A）、寛政九年段階で西紙屋が集荷していない地域の木綿織出し数（B）、A群における西紙屋の仕入割合（C）を記載した。まず、C群からみてみたい。西紙屋の集荷地域での木綿生産数は一二万反である。この内、西紙屋は五万反を仕入れ、残り七万反の内、倉吉商人が大坂に五万反、京に一万反を積み登せていた。そして残り一万反を在地商人が領内外各地に販売していたことがわかる。西紙屋は集荷地域で四割近くのシェアを一軒で占めていたのであるが、一方で、倉吉商人は同地域での織出し数の半数を押さえていた。西紙屋の集荷地は倉吉周辺地域も含まれているため、倉吉商人の集荷地と重複、競合関係にあったのである。

京本店木綿方役人は、現状の生産数、西紙屋の仕入数、倉吉商人の仕入数を把握した上で、仕入不足への対応を開始した。

〔史料八〕^①

扱又大坂店例年老万反位注文被相立候、左候得者八万反買入出来不申候半而ハ工面不宜候へ共、大好之儀ニ候へ者
迎茂員数買入之程無覚束奉存候、成丈風合宜品出情相調六万反位者買入出来可申与奉存候、引残式万反不足ニ有之
御相談申上候、以上

〔史料八〕は寛政九年九月段階の伯州木綿注文に際して、木綿方役人が重役手代に向けてつけているコメントである。木綿方役人は、大坂店の二万反の仕入をあわせると合計木綿注文数は八万反にのぼること、そうならば伯州木綿調達は難しく、注文過多（大好）であるため員数を確保できる確証がないこと、を述べ、京本店重役手代に対して、品質の良い品（風合宜品）の仕入は六万反程度であり、予測される二万反の不足を補う方法を考えるよう促している。前掲

第7表 因伯の主要木綿生産地と西紙屋の把握する織出数

場所	赤崎からの距離	西紙屋の仕入人	キク(規矩) (1反あたりの 価格の目安)	①木綿織出数 年不明 (単位 反)	②木綿織出数 寛政9年 (単位 反)
赤碕地廻り	2~3里圏内	—	3~6匁	15,000	20,000
北条	4里東	買子	5~8匁	15,000	30,000
倉吉	5里東南	代買	4~7匁	20,000	2,000
倉吉地廻り	5~6里東	—	7~9匁	5,000	30,000
橋津	5里東	—	6~8匁	—	3,000
A 逢坂辺	2里西	買子	—	10,000	—
汗入郡	5里西	買子	3~6匁	20,000	15,000
国信	5~6里西	—	4~6匁	—	15,000
高ノ庄	5里南	—	—	3,000	—
淀江	6里半西	買子	5~7匁	4,000	5,000
小計(イ)				92,000	120,000
B 米子(ロ)	8里西	—	—	28,000	40,000
大篠津(ハ)	13里西	—	—	8,000	—
因州青谷(ニ)	8里半東	①代買 ②買宿	—	7,000	7,000
因州麻野(ホ)	10里半東	—	—	4,000	—
総計(イ+ロ+ハ+ニ+ホ)				139,000	167,000
C (イ)の内、西紙屋の仕入高				—	50,000
同上、倉吉商人より大坂問屋へ登せ高				—	50,000
同上、倉吉商人より京都問屋へ登せ高				—	10,000
同上、国方にて諸方へ販売高				—	10,000

出所) ①は「尾印動要記」(三井文庫所蔵史料 本1516)、②は「用事留」(三井文庫所蔵史料 本777)。

注) 1 ①部分は拙稿2012の第3表も参考に作成。

2 ①は年不明だが、青谷の仕入を代買が行っているとしているため、寛政7年以前と思われる。

3 (ロ)(ハ)(ニ)(ホ)での西紙屋の買入高は記載されていない。

〔史料六〕の寛政八年段階における木綿方役人らの意見では、四方反程度の仕入が限度であるとの認識であったが、第7表にみえるような再調査の結果、最大六万反は仕入可能との見通しをたてたのだろう。

翌月、木綿方役人は、不足分補填の対応策を練りだし、京本店重役手代に意見を求めている。

〔史料九〕⁽²⁾

是迄之姿ニ而ハ随分出情相調候而、太駄六万反位なら而ハ買入出来不申候、然共前書相認候通、倉吉商人より^(京都)当地并ニ大坂問屋方へ六万反も登り木面有之候へ者、右之内風合宜分撰買ニいたし候ハ、式万反余も買入出来可申哉、尤坪買とハ式三分方

も高直ニ可有之候得共、惣平均ニ見候而ハイ歩位之事ニ有之候、併彼地へ罷下買方致見不申候半而ハ与得致候儀相分りかたく、尚委細之儀ハ口上を以可申上候、宜御評定可被下候、以上

〔史料九〕は第7表の史料への添付記事で、木綿方役人から京本店重役手代に対する意見書と思われる、仕入不足への対策を述べている。これによると、「史料八」と重複するが、まず従来通りの仕入方法では六万反くらいでなければ仕入できないとし、特に倉吉商人と競合しないように仕入を行うには六万反を確保するのが精一杯だとする。そして、第7表でみたように倉吉商人から京・大坂の問屋に合計六万反も積み登せている状況をふまえて、倉吉商人経由の京・大坂積み登せ木綿のうち、風味の良いものを品質・価格を見極めて京・大坂問屋から購入（撰買）したら、二万反以上の仕入ができるのではないかと提案している。仕入不足分の現地直仕入ではなく、京・大坂で伯州木綿を仕入れる方法に一部転換しようというのである。京・大坂での仕入での購入価格上昇については、現地での「坪買」よりも二、三%高値になるが、全て平均すれば最終的に一%程度の増加ですむと見積もっている。そして、実際に京・大坂問屋のところで仕入を試みなければ状況判断できないこと、詳細は口頭で陳情することとし、京本店重役手代の判断をあおいでいるのである。

このように、京本店内部では、倉吉商人との現地での直接的な木綿争奪戦を避け、買宿を通して行う伯州木綿の直仕入のみならず、倉吉商人の積み登せルートによって京・大坂にもたらされた伯州木綿の買い取りという方法すら模索していたのである。仕入不足という現実には直面した京本店は、伯州での仕入限界量（すなわち西紙屋の集荷能力の限界量）を把握し、現地の状況を考慮した現実的な仕入方法を練る段階にいたったのである。

2 京本店と西紙屋の協議

その一方で、京本店では現地での八万反調達可否も検討している。寛政九年（一七九七）、京本店では買宿西紙屋と現状認識と対策を協議した。

[史料一〇]⁽⁴⁾

一 木綿買方注文年増相高、（寛政九年カ）当年大坂共八万反斗之入用ニ相見え候、右ニ付買方格別出情不致候而者、地風能物斗八万反も買方致候義不易候、右ニ付存入左之通

一地廻り北条、汗入、青屋、此買方は迄之通買人無手抜指出し候事

一米子辺汗入郡より紙佐殿へ持参り候小商人在方買集木面十人参り候ハ、八人迄ハ買はつし不申様、少々最初ハ直段ゆるやかニ買取遣し候へハ、右買子之向紙佐殿見当ニ持寄も、十人参り候内式三人にしてハ手合難出来候而ハ五六里も持参候無甲斐、左候へハ己と米子商人抔江持行、紙左殿方人寄無少相成候道利ニ候へハ、小商人多取合候様工夫候事

一 倉吉商人北条辺木面專買取申候、右倉よし商人江八九步通りハ国方ニ而、此方江売り候へハ即銀ニ相成、銀廻り宜敷故相望候方ニ可在之候得共、此方ひろい買とハ格好仲買口銭丈高直ニ相当り候ゆへ、此方進ミ不申ニ付、備前岡山江為替取荷物差送り、又ハ倉よしより直々大坂淀屋清兵衛と申伯州商へ送り遣し候、全倉吉大坂為替相嵩候哉、近来淀屋清兵衛方手広相見え候、此末倉吉商人江月に兩三度も参り、見世方木面之内風合宜敷物撰買にいたし、是迄大坂為上譬ハ三万反いたし候所、此方へ老万反も買取候様致度候、勿論ひろい買とハ平均三分方も高直ニ可在之候へとも、惣買高員数八万反之内へ三分方高直之品式万反交り候而も、惣平均ニ京都ニ而直打ならし

候時ハ、漸老分方高直ニ相当り候と申もの故、外国木面買調候よりハ工夫候所利詰宜敷候へハ、以来倉吉商人江買方実ヲ入相調申度候、勿論為登候節東買ゆへ、ひろい買之分とハ何分と時々通達可致事

一米子辺并大篠津、年分三万反位ハ出方可在之、尤米子者北前舟手へ商ひ致候故、舟手向宜敷候時節ハ、赤碕辺之相場はつれ高直ニも在之候事御座候へ共、又時節ニ寄、入舟無少舟手淋敷節ハ、利口ニ買方出来候義も在之候故、是等も時々様子見聞可致事

一大篠津、此揚所者冬中正月一盃ハ木面出方無之候へ共、二月上旬より木面織出し、尤最初程木面宜敷、後ニハ出来あしく相成候故、二月上旬より三月節句頃迄之所ハ無油斷買取申度候、此場所足物多、仕立上ケ立羽ニ而、最初ハ向店生下シ江望候得共、二反ニ裁分ケ候而ハ不宜、近来己と買方ニ不参様子ニ候へ共、近年ハ反切多相成候様子故、是等も明春ハ三千反斗買方致見候事

「史料一〇」は寛政九年に京本店と西紙屋との面談の記録であり、西紙屋の意見をふまえて現地での最大限の仕入努力を提言している部分である。京本店は、仕入不足の問題化する中で、八万反に及ぶ仕入が現地でも可能か否かの諮問を行ったものと思われる。一条目からわかるように、京本店は、品質の良い木綿を京・大坂分合計で八万反確保するのは特に励まなければ困難とし、京本店の注文数は西紙屋にとって仕入能力を超過したものであることを認めた。その上で、京本店は伯州木綿の仕入について、現地での八万反調達案として、①従来から扱っている木綿の別口仕入ルート開拓（周辺地域での仕入体制維持、米子商人・倉吉商人からの仕入方法見直し）、②新たな木綿の仕入ルート開拓（米子方面・大篠津方面からの仕入）、を提示し、右の問題を解決しようとしていた。

（一） 赤碕周辺での仕入維持

京本店は、まず既存の木綿仕入体制の維持を徹底している〔史料一〇〕二条目)。西紙屋の所在地である赤碕周辺(地廻り)と、北条(赤碕から東に四里ほどの地域)・汗入郡(赤碕から西に五里ほどの地域、米子との中間)には、これまで西紙屋の買子を生産者や仲買に派遣して直接木綿を仕入れ、良質木綿を織り出す青谷については、先述のように角屋直三郎を代買に任命して木綿の重点仕入を行っていた。前掲第7表のA群・B群は西紙屋の把握する木綿生産地での織出し数である。①寛政七年以前の数字と②寛政九年の数字があり、西紙屋の仕入地域(A群)とそれ以外の木綿生産重要地域(B群)の数値を記載した。青谷は、②段階では角屋の直仕入地となっているため管轄外になっているが、①段階では西紙屋の集荷地域に含まれていた。第7表によると、寛政九年段階の各地の生産木綿は北条で三万反、汗入郡で一万五〇〇〇反であり、その他、青谷では七〇〇〇反の木綿を織り出していった。これらの地区での仕入については、従来通り買宿・代買・買子による仕入を手抜き無く行うこととしている。既存の重点仕入地では仕入数の増加をはかるのではなく現状維持を目指していたのである。

(二) 米子小商人からの仕入

次に米子周辺の小商人(木綿仲買)との取引方法について見直しを図っている。米子の木綿流通は『新修米子市史』で述べられており、文政年間以降の藩の流通統制のなかで木綿商人の活動を明らかにしている。⁽⁵⁾たとえば、文政元年(二八一八)には米子商人の遠藤吉太郎が因伯両国の木綿支配を任じられて木綿買座を設置し、在地で生産される木綿全てを統制しようとし(文政五年に中止)、また嘉永三年から五年には米子商人の鹿島家二〇〇〇両を供出して木綿座(木綿座は木綿を持ち込んだ商人に銀札を貸し付けて次の木綿仕入資金にあてさせ、一方で大坂に木綿を積み登させて売りさばいた正金銀を藩に返納する藩の流通統制機関)を設立しており、関与した米子とその周辺の木綿問屋は元治元年段階で三七人にのぼった。また嘉永七年(安政元年・一八五四)、米子の木綿問屋、澤屋佐吉・澤屋仁右衛門・門生

屋甚吉の三名が大坂西信町の問屋、赤穂屋喜兵衛から年賦銀滞納で出訴された史料によると、天保頃に澤屋・門生屋は赤穂屋に木綿積み登せを行っており、年間一万両余の取引があった。⁽⁶⁾このように米子の木綿問屋は周辺地域の木綿を集荷し、米子・境を通じた海路での木綿移出、岡山等を経由する陸路での大坂積み登せを展開していた。

京本店では米子の小商人の扱う汗入郡の木綿に注目していた（「史料一〇」三条目）。汗入郡は西紙屋の主力集荷地であり、米子の小商人の中には汗入郡内で木綿を集荷しそのまま赤碕の西紙屋に持ち込む者がいた。京本店ではこの米子周辺の小商人のうち、十人中八人までは買いそこなわないように提言する。すなわち、最初は値段付けを緩くして買い取れば、小商人は西紙屋を取引相手として持参するようになる。十人中二、三人しか買い取らないようでは売買契約もできず、小商人側もわざわざ五、六里も離れた赤碕まで持参する甲斐もない。自然と木綿を扱う米子商人の方へ持参し、西紙屋に持参する小商人は少なくなるのは当然であり、小商人と多く関わり合う（「取合」）よう工夫する。

汗入郡は西紙屋の木綿直仕入の重点地ではあるが、西紙屋の抱える買子の仕入だけでは京本店からの注文数に对应できなかった。一方、寛政年間において、在地の小商人が米子周辺、汗入郡の木綿を集荷し、西紙屋や米子商人に持ち込むような経済活動が展開されていた。そこで京本店では、商品を京本店の望む汗入郡の木綿に限定し、現地で形成されていた在地商人の集荷活動を利用して積極的に木綿を買い取ることで仕入数を確保しようとしたのである。

（三） 倉吉商人からの仕入

京本店は倉吉商人を対象とした取引方法も提案している。倉吉の木綿問屋と木綿仲買については、『新編倉吉市史』で触れられており、米子同様に一九世紀以降の状況を述べている。⁽⁷⁾木綿問屋については、天保五年（一八三四）の久原・山口番所を通過する坂越し荷物（中国山地を越えて上方・瀬戸内に陸送する荷物）の取扱い商人として倉吉木綿問屋が一五名いること、年間一五万反が山口・久原番所を経て領外移出されていること、嘉永五年の因伯木綿商人宛の大坂木

綿問屋商人の書状には倉吉商人として一三名の名前がみえること等が明らかにされている。また木綿仲買については、「在方諸事控」天保四年八月二十九日条に河村・久米・八橋三郡の木綿繰綿仲買が増加し、倉吉商人が難儀しているため右三郡の木綿仲買に規制を加えるよう願ひ出ていること、同史料天保十一年七月十日条に近年の木綿仲買の状況が記されており、河村郡のみで木綿仲買が二四、五軒あり、集荷した木綿を京・大坂の木綿問屋へ送ること、その他仲買の中には大坂問屋との間で仕入金の前貸と口銭収入による関係が結ばれている者もいること、三井手代が仲買を訪れて仕入れていく場合や倉吉商人の店方で売る場合もあることがわかるという。『新編倉吉市史』では河村郡の場合、在方仲買、倉吉商人、三井手代、京・大坂の木綿問屋が協力し、あるいは争って木綿を仕入れるため、販売価格の高騰と生産農家の生産意欲の向上がみられたと指摘されている。

京本店では倉吉商人の扱う北条木綿に注目していた（「史料一〇」四条目）。すなわち、倉吉商人は北条周辺の木綿を主に仕入れている。この倉吉商人の八、九％は領内で木綿を販売しており、西紙屋へ持ち込めば即銀で買い取ってくれるため銀廻りが良く、西紙屋への売込みを望む者もいた。しかし西紙屋は生産者から直接集荷する「ひろい買」と比べて仲買口銭の分だけ高くなるので、積極的に行ってこなかった。そのため、備前岡山方面への為替取組による荷物送りや、倉吉から直接大坂淀屋清兵衛(9)という伯州商人へ木綿が流れていた。京本店では、倉吉から大坂への積み登せ数の増大を危惧し、特に、淀屋清兵衛が手広く取引をしていることに注視していたのである。そこで京本店では、倉吉商人へ月に二、三度赴き、商人の店で木綿を吟味し、品質の良いものを撰買し、大坂登せに回っている木綿が三万反あれば一万反は買い取るようにしたいと提言している。撰買なので「ひろい買」に対して平均三％ほど高値になるが、全仕入数八万反のうち三％高値のものが二万反混ざったところで、京本店で値打ちならした時には一％程度になるため、他国木綿を仕入れるよりは良い方法であり理に適っている、という判断であった。以上を踏まえて、京本店では倉吉商人か

らの仕入は力を入れて行うこと、木綿積寄せの際は「東買」と「ひろい買」の区別をその時々に通達することを提言している。

先述のように、倉吉商人の中には、西紙屋に木綿を持ち込んで売り込む者もいたが、寛政年間段階になると、倉吉商人は備前岡山へ積み送り、岡山から大坂の木綿問屋や大坂伯州問屋へ積み登せるようになっていた。特に、淀屋清兵衛が有力な引受先であり、この時期、淀屋は大坂での伯州木綿仕入のシェアを急速に拡大していたのである。三井越後屋の資金力に裏付けられた西紙屋の木綿買い取りは倉吉商人からの受けも良かったといえるが、消極的な仕入姿勢に倉吉商人が離れつつあった。逆に、淀屋は当該期から、豊富な資金力を利用して伯州木綿仕入をすすめていった。京本店はこれに対抗して、倉吉商人から西紙屋に持ち込まれる木綿を待つのではなく、商人の店に出かけて現物を見て撰買し、大坂登せになっている木綿の一部を西紙屋で引き抜く方針を提示したのである。

（四）新たな木綿の開拓―米子・大篠津よりの仕入―

京本店は、木綿の仕入不足を受けて、これまで軽視していた地域での木綿仕入も対象にいれるよう模索する。その対象地は、織出し数は相当量ありながらも、京本店の好みと合致しない木綿（悪風¹⁰）として仕入を行ってこなかった伯州西部の米子・大篠津であった（「史料一〇」五条目）。

京本店は、米子・大篠津を毎年三万反の織出し地として注目している。第7表によると、米子と大篠津の織出し数は寛政七年以前段階で三万六〇〇〇反（米子二万八〇〇〇反、大篠津八〇〇〇反）、寛政九年段階で合計四万反であった。西紙屋の把握している限りにおいて、同地域は伯州各地の中でも一大生産地の一つだった。

京本店は、まず米子での木綿の状況分析と仕入方法の検証を行っている。すなわち、米子の木綿は北前船向けの荷物として販売を行っているため、船手向きの販売が好調な時期は赤碕周辺の相場と比較しても大きく逸脱して高値になる

こともある。しかし、時節によっては入船が少なく、北前船相手の商売が不振の状況もあるため、その時に利口に仕入れることもできるため、米子での状況をよく把握すること。北前船への下り荷としての木綿需要の高さゆえ、京本店では、米子での木綿仕入を重視していなかったが、入船の有無で相場が変動するため、相庭下落を見計らって工夫して仕入を行うよう提案しているのである。

次に大篠津での木綿仕入を検証している（「史料一〇」六条目）。大篠津は弓ヶ浜半島の中頃に位置し、綿作と木綿生産の盛んな地域であった。京本店では大篠津での木綿生産と仕入方法を次のようにみていた。すなわち、大篠津は冬の正月一杯の木綿織り出しが無く、二月上旬から織り出されてくる。最初の木綿ほど品質が良く、後になれば品質が落ちるため、二月上旬から三月節句までの木綿は油断無く仕入れたい。大篠津の木綿は疋物仕上げが立派であり、当初は江戸向店への生下シとして想定していたが、二反を裁ち分けたら良くなかったため、自ずと仕入にいかなくなった。近年は一反裁ちの木綿も多く出回っているため、大篠津の木綿も来春からは三〇〇〇反も仕入できるだろう、としている。疋物中心の大篠津の木綿は、三井越後屋の好む製品でなく、また仕入のタイミングが難しいため、積極的な仕入をしていなかったが、品質向上により仕入れられる状況になっていることがわかる。織出し地での木綿織の普及と共に、生産品の品質向上（三都での需要に合致した製品の生産）も急速にすすんでいたのである。

寛政年間の仕入不足の状況下において、京本店では、米子商人・倉吉商人の扱っている汗入郡・北条の木綿の仕入と、米子・大篠津の木綿の積極的な仕入を展開しようとしていた。この一連の史料では最後に「無手抜出情被致候ハ、随分八万反買方相調可申哉と奉存候」と続けて締めくくっている。京本店としては、以上の方法を採用れば八万反の仕入を達成できると考えていたといえよう。しかしこれらは非常手段であり、現実的な仕入体制ではなかった。買宿一軒での大量木綿発注への対応は実質的に困難だったのである。

3 伯州木綿の注文調整

仕入限界量を把握した京本店では、注文数の調整を実施するようになる。先述のように京本店では各営業店の必要木綿量を集計し、京本店で数量調整のうえで、西紙屋に発注していた。第4表で各営業店の必要木綿量（A～D列）、京本店の確定した必要量（E列）、京本店から現地への注文数（F列）を記載したが、ここから京本店での調整機能をもとれる。例えば、寛政八年（一七九六）の場合、各営業店の必要木綿量合計は五万一一六〇反、京本店確定必要量は五万九三六〇反、京本店から西紙屋への注文数は六万反であり、各店舗の必要量に対して増量調整して注文している。この方法は寛政九年まで行われているが、寛政十年（一七九八）には、各店の必要量六万二〇六〇反に対して、京本店から西紙屋には六万反の発注にとどめており、これ以降、各店舗の必要量に対して京本店で減量調整して西紙屋に発注している。文化五年（一八〇八）の四万二〇〇〇反の削減など極端な減少も見られるが、多くの年で一万六〇〇〇反から一万八〇〇〇反程度行っているのがわかる。これまで述べてきたように寛政七年から寛政九年にかけて注文過多と仕入不足の経験を受け、寛政九年に大量仕入の可否を検証した結果をふまえ、寛政十年から京本店では伯州木綿注文数の減量調整を行ったといえよう。

木綿注文の注文削減は、生産地との関係だけでなく、江戸・大坂の各営業店との関係でも重要であった。

〔史料一〕⁽¹⁾

(前略)

右員数注文好高御座候、然ニ下り違等も有之、右員数入用ト見而ハ持物過ニ相成候間、凡チ掛^(八)ニて注文入用高都合

「史料一二」は文化四年の注文数作成の際の注意書である。ここから、注文数の調整に苦慮している木綿方役人の状況がうかがえる。「右員数」とは文化四年の注文数（第4表E列）の八万一三七五反である。木綿方役人はこの数値を各店舗の仕入必要量（「好高」）であるとするが、江戸・大坂各営業店からの実際の注文との間に誤差が発生し、各営業店への下し高に増減（「下り違」）が生じること、この予測数値の通りに仕入れると在庫（持物）過多となることを憂慮している。そのため、木綿方役人は、京本店で算出した注文数から八掛にして注文するのが妥当と判断しているのである。

第8表は、第4表に掲載できなかった京本店の有物、来春夏追加注文・不足分のみ抽出したものである。例えば、寛政十年段階の有物高（在庫高）は二万七〇〇〇反あるが、この数字は前年・前々年と比較して急に跳ね上がっている。急激な注文増加によって仕入不足は発生したものの、実際の仕入量そのものも増大し、その結果、有物（在庫）も増加したのである。木綿方では、注文数を抑制する方向で数字調整を行なったが、それは、仕入不足の解消を第一としつつ、一方で在庫滞留の防止も意識したものであった。木綿方役人は、江戸・大坂各営業店から伯州木綿を注文するよう促すだけでなく、仕入不足も在庫滞留も起こさないバランスの取れた注文数確定作業を求められていたのである。

- (1) 「已秋伯州買方調」寛政九年九月条（伯州買方控）三井文庫所蔵史料 別一七三二。
- (2) 「寛」寛政九年十月（用事留）三井文庫所蔵史料 本七七七。京本店木綿方役人から京本店重役手代への相談書。
- (3) 第7表に記載した各地の木綿織出数、西紙屋・倉吉商人の積寄せ反数のこと。

第8表 京本店の伯州・雲州木綿注文高
(単位：反)

	有物	来春注文 并夏注文 共三店仕 入不足	差引
寛政8年辰	1796	12,500	20,700 (8,200)
寛政9年巳	1797	4,200	18,300 (14,100)
寛政10年午	1798	27,000	22,700 4,300
寛政11年未	1799	27,160	23,080 4,080
寛政12年申	1800	33,296	23,720 9,576
享和元年酉	1801	26,840	28,400 (1,560)
享和2年戌	1802	15,320	24,900 (9,580)
享和3年亥	1803	22,910	31,210 (8,300)
文化元年子	1804	35,150	31,800 3,350
文化2年丑	1805	28,900	24,900 4,000
文化3年寅	1806	30,800	23,000 7,800
文化4年卯	1807	35,600	34,500 1,100

出所)「伯州買方控」(三井文庫所蔵史料 別1722)。

注) 差引の部の括弧なしは過分、括弧ありは入用分。

(4) 「伯州買方ニ付紙佐殿面談之覚」(三井文庫所蔵史料 本一四七四一四〇)。

(5) この段落の米子の木綿流通については特記のない限り『新修米子市史』の記述に基づく(『新修米子市史』第二巻、通史編近世、二〇〇四年、第一編第二章第四節「米子の各種産業」船越元四郎執筆担当、一三五～一三七頁、同第一二節「藩の経済政策と米子」松尾陽吉執筆担当、四九八～五〇二頁)。

(6) 『米子市史』(一九四二年、第十八章「藩政時代の産業」、六八〇～六八二頁)。

(7) 以下、本段落の叙述は『新編倉吉市史』(第二巻、中・近世編、一九九五年、第二編第一章「政治・経済・社会」、三六一～三六四頁)。

(8) 『鳥取県史』(第一巻、近世資料、一九八一年、一三六九頁)。

(9) 『鳥取県史』によると、淀屋清兵衛は倉吉の淀屋(牧田家)より出ているといい、大坂の淀屋(牧田家)清兵衛家の初

代治郎右衛門は倉吉の淀屋三代五郎右衛門の四男であり、大坂淀屋清兵衛家は代々清兵衛を襲名。後継者がいない場合、倉吉淀屋から養子を迎えていたという。また、淀屋は木綿問屋として天保十年(一八三九)までに伯耆西三郡の木綿を取引しており、嘉永五年(一八五二)の因伯木綿商人あて大坂木綿問屋書状の中にも大坂木綿問屋として名前が見え、嘉永段階において大坂における鳥取木綿の独占販売をする商人であったという(『鳥取県史』第四巻社会経済、一九八一年、第一章第四節四「倉吉町方の推移」手嶋義之・日置条左エ門執筆担当、二七〇～二七一頁)。

(10) 「因幡伯耆地図」(三井文庫所蔵史料 続七三三一九、前掲下向井論文二〇一二年の地図参照)では鳥取西部を流れる日野川以西地域(米子や大篠津を含む)の木綿を低く評価しており(「川ヨ

り西、悪風」、生産量の多さは認識しつつも関心を払っていなかったと思われる。

(11) 「卯秋伯州買方調」文化四年十月条(「伯州買方控」三井文庫所蔵史料 別一七三二)。

六 仕入補完体制の整備

前章で述べたように、京本店では注文数の調整など、内部で対処可能な仕入不足解消の対応を取ったのであるが、一方で、伯州木綿の不足分を補うため仕入体制増強をなかった。伯州木綿仕入に関する史料には、仕入不足の際に他所木綿で補填している様子がうかがえる記事が散見される。本章では、時系列に沿って他所木綿での伯州木綿補完体制をみていこう。

1 阿州木綿直仕入体制

先述のように京本店では、寛政八年段階で仕入不足が予想された際に、大坂本店の阿波木綿直仕入に便乗して不足分を補なおうとした。一方、大坂本店も、河内木綿の代替として西国の木綿直仕入を模索する中で、伯州木綿以外にもいくつかの地域の木綿に目をつけた。伯州木綿とともに注目していたのが阿州木綿だった。

【史料一二一】⁽¹⁾

一 先年(天明二年)より伯州直買相建候所、余国より格好克候ニ付、江戸・大坂年増揃宜、(寛政八年カ)今年杯ハチウ万反余之買方ニ相成致大慶候、乍併右好員数は国方難調趣、然ル時ハ好員数下シ不足ニ可相成、此段残念存候、然ニ大坂店ニ而者、是

迄阿波木綿問屋より、年分余程宛相調問ヲ合セ来り候

一 右阿州木綿全体綿性宜ク、遣勝手克可有之、此末大数相調度、依之大坂店河田作兵衛・家城藤吉兩人彼地江為見
繕罷越、直買相企、則仕法相建来り候ニ付左ニ記ス

一 阿州城下佐古町九丁目

森屋利兵衛
手代文兵衛

（中略）

一 右兩人^{（河田・家城）}乍序備前岡山江も罷越、直買宿相頼置候所左ニ記ス

一 備前岡山城下下尾上町

樽屋又五郎

〔史料一二〕は寛政八年（一七九六）段階の記述と思われるが、この史料から、大坂本店が直仕入に力を入れていた
木綿がうかがえる。大坂本店が最初に重視したのは伯州木綿であった。すでに指摘したことだが、この史料でも再確認
しておこう。伯州木綿は他国のものより価格・品質がちょうどよい（「格合宜」）品であった。江戸各店・大坂本店でも
京本店を介して伯州木綿を仕入れていた。しかし、江戸・大坂各営業店からの発注が年々増加し、寛政八年（一七九六）
段階で西紙屋への発注量は八万反から九万反余にのぼっていた^{（2）}。そのため、伯州木綿の仕入不足が発生し、江戸・大坂
の各営業店の仕入希望量に対する送荷不足（下し不足）も発生する事態に陥っていた。

大坂本店ではこの状況において阿州木綿に注目した。これまでも阿波木綿問屋から少量ずつ仕入れており、阿波木綿
は綿の性質が良く、使い勝手も良いことを把握していた。そこで伯州木綿の仕入を継続しつつ、阿波木綿の大量仕入を

行うこととしたのである。

阿波木綿と買宿の見繕いのため、大坂本店支配の河田作兵衛・京本店支配の家城藤吉を阿波へ派遣し、直仕入の交渉を行い、規則を策定し契約を締結した。大坂本店が直仕入を任せたのは阿波の城下にある佐古町⁽³⁾の木綿問屋・森屋利兵衛の手代文兵衛であった。買宿としての契約や規則などは確認できていないが、この続きに「右之仁甥別家同町定兵衛と申方ニ而直買いたし候積り也」とあり、定兵衛を通して阿州木綿の直仕入を行ったものと思われる。さらに、河田と家城は備前岡山にも赴き、岡山城下・下尾上町⁽⁴⁾の樽屋又五郎（木綿問屋と思われるが現時点で詳細不明）とも木綿直仕入の買宿契約を結んだ。このように、京本店と大坂本店では伯州木綿の仕入を主軸におきつつ、阿州木綿や備前木綿へも買宿を設置し、仕入不足に際して直仕入できる体制を構築したのである。

京本店では、京本店支配退役の中西宇右衛門⁽⁵⁾を、阿州木綿の直仕入のために阿州に派遣した。宇右衛門は寛政九年（二七九七）十月十九日に下坂し、翌年五月十二日に帰京している。⁽⁶⁾ 先述の定兵衛方を利用して、七ヶ月間仕入任務に従事していたのであろう。

2 尾州木綿の仕入

このほか、確認できるのは尾州木綿での補填である。

〔史料二三〕⁽⁷⁾

（前略）然ルニ矩規カカ入よりチツ入迄出方無数下り不足相成、伯州斗ニ而者迎茂入用員数出来申間敷と奉存候、依而尾州江右直越不足之分注文相立申度御相談申上候、御指図可被下候、以上

「史料一三」は寛政十一年（二七九九）十一月の史料であり、伯州木綿の注文書作成時の木綿方役人の意見である。

この直前には第4表の寛政十一年の数字が入っている。同年の京本店で確定した注文数（E列）は六万二二二六反、西紙屋への発注分は五万反であった。木綿方では同年の注文について、注文段階で一反あたりの目安（「規矩」）で六匁六分から八匁四分の木綿は織出し数が少なく不足が出ることに、伯州だけでは員数を調達できないだろうことを予測していた。そのため、代替手段として、尾州木綿のうち同じ価格帯（「右直越」）の木綿を不足分だけ注文するようにしたい、と重役手代に相談している。第1図でみたように、三井越後屋における尾州木綿の主要な仕入店は江戸向店であり、江戸向店の仕入に便乗するかたちで必要に応じて尾州木綿を確保していたと思われる。

天明二年に伯州木綿仕入を始める段階で、尾州三州木綿との品質・価格比較を行い、価格面において伯州木綿が優れていたことから直仕入を開始した経緯がある⁽⁹⁾。より高級な尾州木綿で、安価な伯州木綿を補填するというのは本末転倒な状況であるが、品質面において優位にある尾州木綿のなかでも低価格帯の木綿においては伯州木綿を補填することが可能だったのである。京本店木綿方役人は様々な手段を駆使して仕入補填に奔走していたのである。

3 備後三原木綿の仕入

ところで、不足補填の木綿の中には、備後三原で集荷・積登せされた木綿も含まれていた。広島藩内では近世前期から木綿織が発展しており、近世後期にはさらに盛んになっていた。広島藩領内から他国に移出された木綿類は安永九年（一七八〇）段階で一万反あり、天明六年（一七八六）に安芸国ほか六ヶ国から大坂に積み登せた白木綿は一〇万反であったという⁽¹⁰⁾。

三原での木綿生産について詳しいことはわからないが、文化年間には新開で綿作を行い、白木綿生産もおこなっていたようである。

〔史料一四〕⁽¹⁴⁾

宮沖御新開(農)濃業専之所ニ而、別而綿作宜敷出来立申候、然ル処度々白木綿織出候様ニ被為仰付候義も御坐候へ共、兎角其業相立不申流合ニ相成申候(中略)当地婦女も近来追々器様ニ罷成申候故、教方行届申候ハ、白木綿ハ不申及、能キ嶋織出可申と奉存候、尤、白木綿之儀者根氣を尽候処直段ニ限御坐候而利潤薄御坐候故、相続難致御座候

〔史料一四〕は、文化五年(一八〇八)に、三原の有力商人檜崎屋仲兵衛が町年寄に提出した町方繁栄策の一部である。仲兵衛は、三原では宮沖新開⁽¹²⁾で作る綿を原料に白木綿生産を藩より命ぜられてきたものの、軌道に乗っておらず上手くいかない現状を述べている。しかし、その一方で、三原の婦女の木綿織技術も向上しており、技術指導が行き届けば白木綿は言うまでもなく上質の嶋木綿すら生産できるほどであると主張している。同時に、白木綿は根氣を尽くしても売値段に限度があり、利潤も薄いので相続困難である、とも述べている。つまり、文化五年段階で、三原での木綿生産は藩のおしで進められていたのであり、三原商人は三原白木綿の生産技術力に一定の自負を持ちつつも、白木綿の利潤の低さに起因する販売不振を課題にしていたのである⁽¹³⁾。

一方、三井越後屋の史料では、三原木綿を京本店で仕入れるようになる経緯が次のように述べられている。

〔史料一五〕⁽¹⁵⁾

口上之覚

一備後国三原と申処、四五年已前より少々宛木綿織出し候由、然ニ同処和泉屋源太郎殿と申仁、右木綿手前へ調査セ度段於大坂大石平右衛門へ相頼被申、同人帰京之節咄合有之候ニ付、風合本形として木綿三反差下し置、是迄少々宛両度被指送候得共、風合格好共格別之儀茂無御座候処、此度持登り被申候品追々風合相廻り直格好茂相応宜相見え申候、尤国方之様子は迄格別余慶織出し候儀ニ而も無之候へ共、兼而ハ御地頭より国産ニも被成度趣ニ而、御役人衆中より格別厚ク御世話被成遣候由ニ御座候、右ニ付追々大数織出し可申、何卒此度少々ニ而茂注文相立呉候様相願被申候ニ付、御相談申上候、尤買銀之処慥成請合人も御座候由ニ候へ共、先方之様子難相分り候へ者木綿着一覧之上相渡し候様談シ遣し可申積ニ御座候、猶委細之儀ハ口上を以可申上候、宜御評定可被下候、以上

「史料一五」は、「史料一四」に先立つ文化二年（一八〇五）末から三年の初頭と思われるが、京本店木綿方役人が重役手代に対して備後三原木綿を補填用として確保する相談をしている記事である。

まず過去の経緯が書かれている。すなわち、三原の商人である和泉屋源太郎⁽¹⁵⁾が大坂本店に赴き、三原で生産・集荷した木綿を積み登せたいと京本店手代の大石平右衛門⁽¹⁶⁾に依頼してきた。平右衛門は帰京した際に京本店木綿方で相談した。木綿方では、品質等の確認のため、木綿の品質見本（「風合本形」）として木綿三反を三原に下した。現地からはそれにもとづき二度ほど少量ずつ木綿を送ってきたが、風合や形は特別に良いということはなかった。つまり、三原木綿の積み登せを提案してきたのは現地商人源太郎であり、「史料一五」が作成される以前の段階において、源太郎の送ってくる三原木綿は京本店の満足する品質ではなかったことがわかる。

しかし、今回（文化二三年）送られてきた木綿は品質も良く値段相応であった。源太郎は、これまで三原木綿は大量生産していなかったが、広島藩が国産品として木綿生産・流通を重視しているので藩役人から格別の便宜を受けること、そのため大量生産も見込まれることをアピールし、少量でも注文してほしいと提案した。京本店好みの木綿集荷を行い、広島藩の殖産興業策を背景として、京本店に売り込みをかけたのである。先述の「史料一四」とあわせて考えると、販路拡大を狙う三原商人は、三井越後屋などの三都問屋資本を三原木綿の販売相手として考えていたともいえる（そして同時に薄利の白木綿販売の限界性も認識したのであろう）。

木綿方役人は三原木綿の仕入の是非を重役手代に相談した。京本店内での議論では、木綿仕入銀が問題となっている。木綿方役人は仕入銀について、現地に確かな請人もいるようだが現地の状況がわからないので、木綿が到着したら品質・価格を一覧の上で代銀を源太郎に渡す予定である、としている。伯州木綿や阿州木綿のように、現地への買宿設置と、仕入金の前貸による木綿調達でなく、現地には注文のみ送り、積み登せてきた木綿に対して源太郎に正金銀で対価を支払う方式を採用したのである。三原木綿の場合、現地商人からの仕入要請に対して、京本店が必要に応じて注文する形式を採用した。京本店では、自ら買宿を置いて積極的に直仕入をするかたわら、商品作物生産の進展により西国各地から積寄せられる木綿を、現地商人を通して仕入れる場合もあったのである。

4 補填の実際

京本店では直仕入により廉価入手可能な伯州木綿を主力商品としつつ、仕入不足が生じた際には阿州木綿・尾州木綿・三原木綿等の多様な他所木綿によって不足分を補おうとした。第9表は、確認できた京本店と大坂本店の木綿買高であり、特に文化四年（一八〇七）には木綿不足が発生した際の補填状況が記されている。第4表で伯州木綿の注文高は五

第9表 京本店と大坂本店の各地の木綿買入高（単位 反）

	京本店						大坂本店
	伯州木綿	阿州木綿	三原木綿	尾州木綿	備前木綿	雲州木綿	伯州木綿
寛政9年	68,226	6,508					9,972
寛政10年							
寛政11年							
寛政12年							
享和元年							
享和2年	41,176					15,680	
享和3年							
文化元年							
文化2年	48,924					14,840	
文化3年	39,790		1,840			17,360	
文化4年	39,852	1,665	560	1,722	756	22,960	
文化5年	26,230					26,320	

出所)「伯州買方控」(三井文庫所蔵史料 別1722)。

万反、雲州木綿の注文高は二万五〇〇〇反となっている。これに対し、第9表で伯州木綿の買入高は三万九八五二反、雲州木綿は二万二九六〇反となっており、それぞれ、一万一四八反、二〇四〇反の不足が生じている。この不足に対して、尾州木綿一七二二反、備前木綿七五六反、阿州木綿一六六五反、備後三原木綿五六〇反を仕入れ、合計六万七五一五反を確保している¹⁷⁾。不足分の全てを補ってはいないものの、伯州木綿の仕入不足補完体制は実際に機能していたのである。

5 雲州木綿の直仕入

一方、この段階において重要なのは、第4表で明らかのように、隣国雲州からの木綿直仕入に着手したことであった。雲州木綿の直仕入もすでに先行研究の中で述べられているが、改めて確認しておこう。先述の通り、京本店は西紙屋の伯州木綿仕入能力に基づいた仕入量を把握した。そして、その不足分の補填のため、雲州に新たな買宿を設置した。文化元年(一八〇四)七月の記事に「雲州平田木面買宿西台屋彦兵衛儀、慥成仁ニ付、去ル寛政十二申年より店表定宿ニ相極メ、彼地木綿為致買方候処、無如才出情被致工面宜候¹⁸⁾」とあるように、雲州平田の西台屋彦兵衛を寛政十二年(一八〇〇)に京本店の定宿に指定し、平田周辺の木綿の直仕入を開始した。

雲州木綿は低価格帯の木綿だった。伯州木綿も廉価帯に位置する木綿

ではあるが、雲州木綿はそれよりさらに廉価な木綿だった。第10表は文化五年（一八〇八）の雲州・伯州木綿の一反あたりの価格帯と価格帯ごとの産地別注文反数の試算とシェアである。注文反数の合計が八万八八八四反になっているが、これは試算にあたり、第4表A列の八万七八五反に仕入不足分などを加えた八万九三七八反を入用高として想定しているためである。これによると、雲州杵築の木綿の価格帯が二匁二分から三匁六分の間で最も低く、次いで雲州平田が三匁から四匁八分であり、最も高いのが因州青谷で七匁八分から一一匁となっており、青谷木綿はかなり高価な木綿であることがわかる。「伯州」となっているのが主に西紙屋の仕入れていた木綿であろうが、三匁四分から七匁二分となっている。価格帯別にみると五匁四分・五匁六分の伯州への注文が八七二反と最も多く、価格帯別にみると五匁・五匁二分で九六九四反である。伯州の価格帯は三匁四分から七匁二分と幅広くなっており、杵築や平田と一部重複しているが、低価格帯部分については杵築・平田への注文数が多くなっている。当該期の雲州木綿は三井越後屋にとって極廉価帯の木綿だった。¹⁹第4表で、享和元年（一八〇一）から文化五年（一八〇八）の雲州木綿の注文数をみると、一万二〇〇〇反から二万反の間で幅があるが、概ね一万五〇〇〇反前後を推移している。一方、同時期の伯州木綿注文はおおむね四万反から四万五〇〇〇反であり、伯州・雲州合計で五万反から六万反程度の木綿を安定的に注文することが可能となった。寛政末年から文化年間初期にかけての雲州木綿仕入は、伯州木綿の注文数に比して少なく、まだ伯州木綿に対して補助的な位置にあったといえるだろう。

以上のように、京本店では、伯州木綿直仕入を主力としつつも、必要木綿量確保のため、雲州への買宿設置や仕入不足時の木綿の補填先の確保など、伯州西紙屋に集中していた木綿注文を分散化し、木綿仕入可能数の総量を底上げしつつ堅実な直仕入体制を構築するにいたったのである。しかし、その安定的な体制を維持できたのはわずかな期間であった。この後、文政年間には伯州木綿流通統制により三井越後屋の伯州木綿直仕入が中止する。文政九年から直仕入を再

寛政年間における三井越後屋の木綿仕入状況とその特質（下向井）

第10表 木綿価格帯別の各産地の注文反数とシェア（文化5年）

（単位：反）

	杵築	平田	齋賀 (雜賀カ)	伯州	北条	青谷	価格帯 別合計
2匁2分・2匁4分	1,898 100%						1,898 100%
2匁6分・2匁8分	3,135 100%						3,135 100%
3匁・3匁2分	3,402 70%	1,458 30%					4,860 100%
3匁4分・3匁6分	1,695 30%	2,258 40%		1,694 30%			5,647 100%
3匁8分・4匁		5,200 70%		2,228 30%			7,428 100%
4匁2分・4匁4分		3,364 40%	2,523 30%	2,523 30%			8,410 100%
4匁6分・4匁8分		1,644 20%	4,110 50%	2,466 30%			8,220 100%
5匁・5匁2分			1,939 80%	7,755 20%			9,694 100%
5匁4分・5匁6分				8,722 100%			8,722 100%
5匁8分・6匁				6,533 100%			6,533 100%
6匁2分・6匁4分				5,743 100%			5,743 100%
6匁6分・6匁8分				3,635 70%	1,559 30%		5,194 100%
7匁・7匁2分				1,267 50%	1,267 50%		2,534 100%
7匁4分・7匁6分					2,131 100%		2,131 100%
7匁8分・8匁					1,217 50%	1,217 50%	2,434 100%
8匁2分・8匁4分					448 20%	1,792 80%	2,240 100%
8匁6分・8匁8分						1,772 100%	1,772 100%
9匁・9匁2分						1,177 100%	1,177 100%
9匁4分・9匁6分						454 100%	454 100%
9匁8分・10匁						307 100%	307 100%
10匁2分・10匁4分						234 100%	234 100%
10匁6分・10匁8分						82 100%	82 100%
11匁以上						35 100%	35 100%
産地別合計	10,130	13,924	8,572	42,566	6,622	7,070	88,884

出所) 「伯州買方控」(三井文庫所蔵史料 別1722)。

注) 1 1反あたりの価格帯とその価格帯における木綿集荷地のシェアを示す。例えば、3匁・3匁2分の価格帯の木綿は、杵築が70%、平田が30%を占める。

2 2分ずつの区切りは、筆者によるものではなく、原史料の記述通り。

開するが、徐々に仕入銀額において雲州木綿は伯州木綿を上回るようになる。⁽²⁰⁾仕入反数でみたときには雲州木綿は伯州木綿を圧倒していくのである。

- (1) 「江戸向店会所大坂店木綿方規矩」(三井文庫所蔵史料 別五)。
- (2) この仕入数は京本店・大坂本店の合計注文数であろう。寛政八年に仕入れるのは寛政七年発注分であり、第2表の寛政七年の注文数七万二〇〇〇反と、寛政八年に大坂本店の直仕入によって大坂に送られた伯州木綿九九〇〇反余(伯州買方控)三井文庫所蔵史料 別一七二二)を合算すると、概ね妥当な数字になる。
- (3) 佐古町は徳島城下西端に位置する、伊予街道沿いに東西に続く町人地。寛文十一年(一六七二)に佐古一丁目から五丁目までの佐古川沿いの屋敷が城下町に編入された。当時は九丁目までであったが、五丁目途中からは郷分であった。寛文二年の佐古町九丁目の家数は四三軒(「佐古町」『角川日本地名大辞典三六 徳島県』角川書店、一九八六年)。森屋利兵衛がどのような商人か現時点で不明。
- (4) 尾上町は岡山城下外堀西側にあり西川との間に位置する。町域は一町一反余(「尾上町」『日本歴史地名大系三四 岡山県の地名』平凡社、一九八八年)。
- (5) 天明二年の伯州木綿直仕入の開始に尽力した人物(前掲下向井論文二〇一二年、一四〇―一九頁)。寛政四年には西紙屋の借銀問題が発生した際、現地に赴き解決にあたっている(『中西宇右衛門書状』三井文庫所蔵史料 本一四七四―三九)。また、文化二年には奥州福島の木綿買方を行っているなど(「永書」文化二年十二月七日条、三井文庫所蔵史料 本一三二一)、木綿仕入に関する特別任務に就いているケースが多い。
- (6) 「永書」寛政九年十月十九日条、寛政十年五月十二日条(三井文庫所蔵史料 本一三〇)。
- (7) 「未秋伯州買方下書」寛政十一年十一月条(「伯州買方控」三井文庫所蔵史料 別一七二二)。
- (8) 『三井事業史』(本篇第一巻、一九八〇年、四二四―四二五頁)。

- (9) 前掲下向井論文二〇二年、一二〜一三頁。
- (10) 『広島県史』（近世2、II-四-1）「安芸木綿と備後絨」渡辺則文執筆担当、一九八四年、四一〜四一四頁。
- (11) 「町方繁栄のことにつき存寄書」文化五年（『三原市史』第六卷、資料編三、一九八六年、一八八〜一九〇頁）。なお、三原の商業活動については『三原市史』で概説されている（『三原市史』第二卷通史編二、二〇〇六年、第四編第三章「城下町の発展」、橋本敬一執筆担当）。
- (12) 元禄十三年（一七〇〇）、三原を流れる沼田川と西町川が形成した三角州に築調された新開。作方は最初麦作であったが、後に綿を多く作ったという（『宮沖新開』『日本歴史地名大系三五 広島県の地名』平凡社、一九八二年）。
- (13) 白木綿の利潤の低さ故、この町方繁栄策の続き部分では、白木綿生産ではなく嶋木綿生産に重点化すること、そのために、周防柳井・大島から織女を招聘して、嶋木綿の技術指導にあたらせ、三原嶋木綿の技術向上を図ること、を提言している。
- (14) 「口上之覚」文化二年末〜文化三年前半カ（『用事留』三井文庫所蔵史料 本七八〇）。
- (15) 三原の木綿商人と思われるが詳しいことはわかっていない。
- (16) 京本店手代で寛政三年（一七九一）正月十九日退。退職時点で組頭（『店々役人名鑑』三井文庫閲覧室配架資料）。ただし、文化二年（一八〇五）十一月四日に「大石平右衛門長崎用向相済、昨日着坂」（『永書』三井文庫所蔵史料 本一三二）とあり、退役した後も京本店の業務に関与している。平右衛門は天明年間に伯州木綿買方役を務め、西紙屋の間屋改役就任や、現地での仕入金確保など、木綿仕入をめぐる重要問題の解決にあっている（前掲下向井論文二〇二年、四八〜七二頁）。
- (17) 「伯州買方控」（三井文庫所蔵史料 別一七二二）。
- (18) 「口上」文化元年七月条（『用事留』三井文庫所蔵史料 本七七九）。
- (19) はじめに、でも指摘したように、雲州では木綿市が展開しており、三井越後屋も木綿市で雲州木綿を仕入れていたとされている。それにもかかわらず、三井越後屋の仕入れる雲州木綿が極廉価である理由は現時点で明らかにできていない。

雲州木綿の具体像については今後検討したい。

(20) 前掲下向井論文二〇一二年、第1表。

おわりに

本稿では、寛政年間における三井越後屋京本店の伯州木綿仕入の動向を、江戸・大坂の営業店や、他店・在地商人との関係の中で具体的に明らかにしてきた。最後に、本稿の内容を以下の三点から整理してみたい。

(一) 仕入における京本店の役割と各営業店の伯州木綿重視

京本店木綿方では、伯州木綿の仕入にあたり、各営業店からの過去の注文実績に基づき、各営業店の必要木綿量を算出し、数量調整して伯州買宿西紙屋に注文書を送っていた。京本店では江戸向店・江戸芝口店・大坂本店からの需要に応じて伯州木綿を仕入れており、その中でも江戸向店からの注文が半数を占めていた。

寛政年間の三井越後屋各営業店の必要木綿量は漸増傾向にあった。当該期の三井越後屋は、他店との販売競争（＝安売競争）の激化等を背景に、廉価木綿の仕入を必要としていた。たとえば、江戸向店の勢州木綿仕入の札掛率の低さ（＝売上益の低さ）や、大坂本店の河内木綿直仕入への出遅れ（＝高級木綿の低廉仕入の失敗）が問題となっており、江戸・大坂双方において廉価木綿の確保が急務となっていた。そのため、京本店では、天明年間以来直仕入を行ってきた伯州木綿の重点化を企図し、各営業店もそれに同調して伯州木綿の注文を増やしたのである。ここで、京本店が江戸向店の勢州木綿から伯州木綿・関東木綿への切替を提言しているように、仕入体制の転換期における京本店（仕入部門であり

各営業店の統括部門）の主導的立場もみとれるであろう。

（二） 仕入不足とその対応

京本店では、各営業店の伯州木綿需要増大にともない、伯州木綿の注文数を増やしていった。寛政七年に京本店では七万二〇〇〇反という前年の一・八倍の注文を現地買宿西紙屋に送った。しかし、その結果大量の仕入不足という事態を招き、西紙屋で集荷できるのは四万反程度という仕入限界量を露呈した。京本店では現地における木綿生産量と西紙屋の仕入能力を把握できず、伯州木綿のみで各営業店の需要増大に対応することは困難だった。京本店は仕入部門として、現地の生産量把握、西紙屋の仕入限界量把握などの重要性を認識したのである。

京本店は注文数そのものの数量調整を行うと同時に、不足した伯州木綿の確保のため、青谷木綿直仕入のための買宿の増設や、関心を払っていなかった一大生産地米子・大篠津からの木綿仕入、倉吉商人の手で積み登せられた木綿を京・大坂で仕入れる方法など、様々な手段を検証した。大坂木綿として「中」級の阿州木綿や備前木綿の直仕入を開始し、より廉価な雲州木綿の直仕入も開始した。また、備後三原木綿の注文仕入や、尾州木綿のような高級木綿の廉価部分を仕入れるなど、他所木綿を仕入れることで不足分を補填した。特に極廉価の雲州木綿は、他所の高価格帯木綿で不足分を補填する場合、仕入木綿全体でならした際に、伯州木綿並みの価格に平準化するのにも重要な役割を果たしたであろう。伯州木綿仕入についてみたとき、京本店では、寛政年間にいたり、伯州木綿を中心にすえつつ、より廉価な雲州木綿で雲伯双方で仕入総量の底上げと分散化を図り、不足分を西国各地（阿州・備前・備後）の木綿の直仕入・産地への注文で補完する体制を構築したのである。これは伯州木綿の直仕入可能量（＝西紙屋の仕入限界量）に適した仕入体制でもあった。

（三） 伯州木綿仕入と在地商人・都市問屋資本との関係（特に大坂市場において）

寛政年間、大丸や恵比須屋などの都市問屋資本は、木綿生産地や堺などに買宿・仕入店を設けて河内木綿の直仕入を積極的に展開していた。また、伯州と関係の深い淀屋清兵衛は、成長しつつあった在地の倉吉商人と結合し、伯州木綿積登せを拡大していた。これに対して、三井越後屋は大丸や恵比須屋のような河内木綿直仕入への参入におくれをとり、淀屋清兵衛らの活動により伯州木綿の積登せ独占状態を崩されていたのである。

しかし三井越後屋は、右のような大坂市場の情勢変化に対して、河内木綿を在地の木綿仲買から仕入れ、直仕入を維持しつつも倉吉商人の積登せた伯州木綿を京・大坂で仕入れるなど、代替策を用意し対応しようとした。大坂商人からの伯州木綿確保は、仕入不足状況下の緊急措置だったとはいえ、現状に対応した三井越後屋の柔軟な仕入活動のあり方を示しているといえよう。

一方、備後三原木綿仕入の事例でみたように、現地商人から三井越後屋への積極的な売り込みもみられた。三原商人和泉屋源太郎は藩の国産品奨励策を背景として三井越後屋に仕入の依頼をしているが、当該期の西国諸藩の国産品積登せが展開しつつある中で、その受入先として三井越後屋のような有力な都市問屋資本が注目されていたのである。

寛政段階において、三井越後屋は、生産地においては在地商人の成長と経済活動の進展に圧倒されつつも、中央市場においては右のような新たな経済活動によって大坂へ積登せられた商品の有力な顧客たりえた。三井越後屋のような都市問屋資本は、特権的な地位にありながら、幕藩制的流通構造の動揺を引き起こしている新たな流通活動の一翼を担っていたともいえよう。⁽¹⁾ 一九世紀には相対的地位低下を指摘される大坂市場も、一八世紀後半においては、成長する西国各地の生産地にとって有力市場であった。本稿でみたように、三井越後屋のような都市問屋資本にとって、西国各地で生産され大坂市場にもたらされる木綿は、廉価仕入を行う上で選択肢拡大にもつながったのであろう。

一九世紀に入り、各地で藩専売制が展開し、生産構造や流通構造も大きく変貌する中で、三井越後屋の伯州木綿直仕

入体制も変化していく。文政年間には鳥取藩の木綿流通統制により伯州木綿直仕入を中止し、雲州木綿の仕入に転換していく。その後、木綿流通統制の廃止により再び木綿を仕入れるようになるが、幕末になると雲州木綿の仕入額が伯州木綿を上回っていく。この流通統制実施前における三井越後屋と鳥取藩との交渉過程や、藩の流通統制が失敗に終わって直仕入を再開する中で在地商人の流通活動との関係など、まだ具体的に明らかにされていない課題は多い。一九世紀の伯州木綿をめぐる問題については別稿において考察したい。

（１）今井修平氏は「都市商人や在郷町の商人を領主側に、在郷商人を農民側に対置して、後者の活動が農民的商品生産の発達と結びつくもの」という理解を評価しつつも、「封建社会を崩壊させる一因としての商品経済の発達そのものは、その担い手が都市商人であると在郷商人であるとを問わない」としている（前掲今井論文）。